

●配達賃金表

里別迄配每一	里在迄村每一	市里迄内每一	○荷物	○證書	○貨幣
七、	三五	一、	目三迄百	百圓迄	十圓迄
一〇、	五、	二、	目一迄	圓三迄百	圓五迄十
一五、	七五	三、	目五迄	圓五迄百	百圓迄
二〇、	一〇、	四、	目十迄	圓七迄百	圓三迄百
二五、	一二五	五、	目十五迄	千圓迄	圓五迄百
三〇、	一五、	六、	目廿迄	圓二迄千	千圓迄
二、	一、	一、	目以上每	以千圓上每	以百圓上每

但シ北海道、佐渡、隱岐、壹岐、對馬、肥前五島等各地方之分ハ本表ニ五割増トス已下
 詳細ヲ畧ス
 此外東京各地間大小都市へ別ニ低額物價運賃表アリ

●通運荷物保險料表

元價	十圓迄	二十圓迄	三十圓迄	五十圓迄	七十圓迄	百圓ニ付
廿五里以內	一〇錢	一二	一四	一六	一九	二〇
五十里	一二	一四	一六	一九	二二	二五
七十五里	一四	一七	二〇	二三	二六	三〇
百里	一六	一九	二三	二七	三一	三五
里百五十	一八	二三	二八	三三	三九	四五
里二百	二〇	二七	三四	四一	四八	五五
里三百	二五	三四	四三	五二	六一	七〇
里以外	三〇	四二	五四	六六	七八	九〇

●貨幣早達便取扱店社

- 本東京本社
- 坂大坂支店
- 形山形出張店
- 栃栃木全店

●荷物保險料

若松全店	足利全店	小田原分社	橫濱支店
青森全店	敦賀全店	博多出張店	藤澤分社
丸龜全店	水戸分社	福島支店	鳥取分社
赤間關全店	甲府分社	函館支店	沼田分社
地岡崎分社	仙臺支店	前橋出張店	須賀川聯合
秋田出張店	名古屋支店	長野全店	松江分社
京都支店	高崎出張店	盛岡全店	白河聯合店
金澤支店	上田全店	宇都宮全店	大垣分社
熱田出張店	湯新湯全店	岐阜全店	熊本分社
千葉全店	岡山全店	靜岡分社	津出張店
郡山全店	直江津全店	掛川分社	熊谷分社
大津全店	札幌全店	三島分社	松本分社

●全早達便運賃表

五圓未滿	十圓迄	十五圓迄	二十圓迄	廿五圓迄	五十圓迄
遠近不問	七	一〇	一三	一六	二〇

●全運賃東京橫濱間

四圓迄三〇	十圓迄五錢	廿圓迄六錢	以上廿圓每二一錢
-------	-------	-------	----------

●銀行位置表

第一銀行	東京府日本橋區兜町一丁目	第二銀行	神奈川縣橫濱區本町三丁目五十三番地
全支店	大阪府大阪東區高麗橋三丁目	全支店	東京府日本橋區本革町壹番地
全支店	京都府京都上京區烏丸通姊小路	第三銀行	全日本橋區小舟町三丁目十番地

●早達便運賃表并三銀行位置表

全支店	大阪府大阪東區本町四丁目	第十一銀行	愛知縣名古屋區茶屋町三丁目七番地
第四銀行	新瀧縣新瀧港東堀前通七番町壹番地	第十二銀行	富山縣上新川郡富山袋町十九番地
全支店	東京府神田區神田佐久間町一丁目十九番地	全支店	大阪府大阪東區北久太郎町一丁目
第五銀行	全日本橋區堀亮町一丁目壹番地	第十三銀行	大阪府大阪東區今橋二丁目十七番地
全支店	大阪府大阪西區立賣堀北通五丁目	全支店	東京府日本橋區南茅場町十二番地
第六銀行	福島縣信夫郡福島町本通八丁目五番地	全支店	京都府下京部下京區四條通烏丸
全支店	東京府京橋區大鋸町十三番地	第十四銀行	長野縣東筑摩郡松本南深志町一番町二百二番地
第七銀行	高知縣高知種崎町百八十四番地	全支店	東京府日本橋區金吹町四番地
第八銀行	愛知縣渥美郡豐橋八町二丁目乙八十五番地	第十五銀行	全京橋區木挽町七丁目六番地
第九銀行	熊本縣熊本區米屋町一丁目七番地	第十六銀行	岐阜縣厚見郡岐阜中新町二十四番地
全支店	大阪府大阪東區西橫堀二丁目	第十七銀行	福岡縣福岡區橋口町八十六番地
第十銀行	山梨縣西山梨郡甲府常盤町二番地	全支店	大阪府大阪西區土佐堀裏町四番地
全支店	東京府日本橋區堀留町一丁目二番地	第十八銀行	長崎縣長崎區東濱町四十三番戶第一號

三百八十四

第十九銀行	長野縣小縣郡上田町八百九十三番地	第三十一銀行	福島縣北會津郡若松元大町二十一番地
全支店	東京府日本橋區堀江町二丁目十番地	第三十二銀行	大阪府東區淡路町二丁目四十一番地
第二十銀行	全京橋區材木町三丁目十三番地	全支店	東京府京橋區南傳馬町一丁目十七番地
第二十一銀行	滋賀縣坂田郡長濱神戶町八番地	第卅三銀行	全日本橋區新右衛門町十五番地
第廿二銀行	岡山縣備前國岡山區船着町七十一番地	第卅四銀行	大阪府東區高麗橋四丁目六番地
全支店	大阪府大阪西區江戶堀南通一丁目二十番地	第卅五銀行	靜岡縣安部郡靜岡吳服町一丁目八番地
第廿三銀行	大分縣豐後國大分町四百四十一番地	第卅六銀行	神奈川縣南多摩郡八王寺橫山町六十四番地
第廿五銀行	福井縣若狹國遠敷郡小濱廣峯町八十五番地	第卅七銀行	高知縣土佐郡本町筋七十番地
第廿七銀行	東京府日本橋區本材木町一丁目七番地	第卅八銀行	兵庫縣飾東郡姬路本町二丁目十七番地
第廿八銀行	靜岡縣敷地郡濱松傳馬町十番地	全支店	大阪府大阪東區今橋四丁目
全支店	東京府日本橋區兜町五番地	第卅九銀行	群馬縣東群馬郡前橋本町九十三番地
第廿九銀行	愛媛縣西岸和郡川ノ石浦十一番地	第四十銀行	全邑樂郡館林町六百八拾八番地
第三十銀行	東京府京橋區越前堀二丁目二番地	第四十一銀行	栃木縣下部賀郡栃木倭町五百拾壹番地

銀行位置表

三百八十五

第四十二銀行	大坂府西區江戶南堀通三丁目三番地	第五十六銀行	全明石郡西本町二十四番地
第四十三銀行	和歌山縣和歌山區拾壹番地	第五十七銀行	福井縣南條郡武生蓬萊町乙三十八番地
第四十五銀行	東京府日本橋區元船町十番地	第五十八銀行	大坂府西區北堀江通五丁目四番地
第四十六銀行	岐阜縣土岐郡多治見村壹番地	第五十九銀行	青森縣津輕郡弘前本町三十四番地
第四十七銀行	千葉縣市原郡八幡宿濱本町六十番地	第六十銀行	東京府日本橋區小船町二丁目一番地
第四十八銀行	秋田縣南秋田郡秋田茶町菊ノ町二十二番地	第六十一銀行	福岡縣三潁郡久留米片原町十八番地
第四十九銀行	京都府下京區第三組玉鷲町百二十二番地	全支店	大坂府大坂西區立賣堀通壹丁目
全支店	京都府京都市下京區六角通町通	第六十二銀行	茨城縣東茨城郡水戸下市竹岡町九番地
第五十銀行	茨木縣新治郡土浦川口町九番屋敷	第六十三銀行	長野縣埴科郡松代町三百三十一番地
第五十一銀行	大坂府泉南郡岸和田本町九百五十二番地	全支店	東京府京橋區南新堀一丁目五番地
第五十二銀行	愛媛縣溫泉郡松山三番町五十二番地	第六十四銀行	滋賀縣滋賀郡大津坂本町二十二番地
第五十三銀行	島根縣鹿足郡津和野山根町八十一番地	全支店	京都府京都東洞院四條
第五十五銀行	兵庫縣出石郡出石田結庄町五十二番地	第六十五銀行	兵庫縣神戸區兵庫戶揚町二十三番地

三百八十六

第六十六銀行	廣島縣御調郡尾ノ道久保町二百九十七番地	第七十八銀行	大分縣下毛郡中津町第二番地
第六十七銀行	山形縣西田川郡鶴ヶ岡三日町三十七番地	第七十九銀行	大坂府東區本町二丁目廿二番地
第六十八銀行	大坂府添下郡郡山柳町一丁目二十番地	第八十銀行	高知縣土佐郡高知農入町十一番地
第六十九銀行	新潟縣古志郡長岡表三ノ町二番地	第八十一銀行	山形縣南村山郡山形七日町十八番地
第七十銀行	京都府久世郡淀下津町百五十六番	第八十二銀行	鳥取縣邑美郡鳥取二階丁四丁目六百八十番地
第七十一銀行	新潟縣岩松郡村上大町第五十五番地	全支店	大坂府大坂東區北濱五丁目
第七十二銀行	山形縣飽海郡酒田本町六丁目三番地	第八十三銀行	三重縣伊賀郡上野中町四十五番地
第七十三銀行	大坂府大坂西區北堀江三番町	第八十四銀行	石川縣江沼郡大聖寺本町九百九十二番地
第七十四銀行	神奈川縣橫濱區南仲通二丁目二十番地	第八十五銀行	埼玉縣入間郡川越南町百七十七番地
第七十五銀行	石川縣金澤區下堤下六十番地	第八十六銀行	岡山縣上房郡高梁下町四百廿六番地
第七十六銀行	岐阜縣下石津郡常盤町一丁目一番地	第八十七銀行	福岡縣中津郡大橋村二十一番地
第七十七銀行	宮城縣仙臺區大町一丁目四十番地	第八十八銀行	岩手縣西磐井郡一ノ關地主町百四十九番地
全支店	東京府日本橋區南茅場町十九番地	第八十九銀行	德島縣名東郡德島寺島町三百二十一番地

銀行位置表

三百八十七

全支店	東京府日本橋區青物町三十一番地	第九十九銀行	長崎縣北松浦郡平戸町五百七十三番地
全支店	大坂府大坂西區北堀江通五丁目	第一百銀行	東京府日本橋區萬町一番地
全支店	岩手縣南岩手郡盛岡十三日町廿三番地	第一百一銀行	福島縣伊達郡梁川町本通百廿二番地
全支店	東京府日本橋區西河岸町十六番地	第一百二銀行	長崎縣下縣郡嚴原大手橋千五百四十四番地
全支店	福井縣足羽郡福井佐佳枝中町百八十五番地	第一百三銀行	山口縣玖珂郡橫山村百五十六番地
全支店	全足羽郡福井佐久長中町百十番地	第一百四銀行	茨城縣東茨城郡水戸市五軒町五番地
全支店	福島縣田村郡三春町字大町廿九番地	第一百五銀行	三重縣安濃郡津大門町千六百四十四番地
全支店	東京府日本橋區小網町三丁目廿四番地	第一百六銀行	佐賀縣佐賀郡水ヶ江町三百八十番地
全支店	兵庫縣揖西郡龍野村九百三十一番地	第一百七銀行	福島縣信夫郡福島町十丁目字通五十番地
全支店	東京府日本橋區留町二丁目十四番地	全支店	東京府日本橋區大傳馬町一丁目七番地
全支店	福岡縣山門郡柳河瀬高町八十三番地	第一百九銀行	大分縣南淺島町佐伯村二百十四番地
全支店	佐賀縣小城郡小城町貳百六十八番地	第一百十銀行	山口縣赤間關區西南部町第三十九番地
全支店	千葉縣千葉郡千葉町七百三番地	第一百十一銀行	京都府下京區第四組梅思町第九番地第三十番戶

全支店	東京府日本橋區本町六番地	第一百十二銀行	岐阜縣郡上郡八幡町七番地
全支店	函館縣函館區末廣町十六番地	第一百十三銀行	岐阜縣安八郡大垣俵町十三番地
全支店	東京府日本橋區本船町十九番地	第一百十四銀行	大坂府東區高麗橋三丁目十番地
全支店	愛媛縣香川郡高松丸龜町二十二番地	第一百十五銀行	京都府京都上京區柳馬場三條
全支店	三重縣鈴鹿郡龜山東之町三十二番地	第一百十六銀行	東京府日本橋區兜町三番地
全支店	新潟縣北蒲原郡新發田上町通第三百九十一番地	第一百十七銀行	滋賀縣犬上郡彦根本町十六番地
全支店	長野縣下伊那郡飯田大横町六百廿三番地	第一百十八銀行	愛知縣名古屋區入舟町三番地
全支店	東京府日本橋區南茅場町廿六番地	第一百十九銀行	熊本縣宇土郡宇土郡本町一丁目百六十五番地
全支店	茨城縣葛飾郡古河江戸町七百九十番地	第一百二十銀行	愛知縣知多郡半田村四百五十四番地
全支店	大坂府東區南久寶寺町二丁目二十九番地	第一百廿一銀行	兵庫縣多紀郡篠山二階町六十八番地
全支店	三重縣桑名郡桑名京町二十九番地	第一百廿二銀行	靜岡縣豐田郡二俣中町百五十九番地
全支店	山形縣南置賜郡米澤立町百廿二番地	第一百廿三銀行	新潟縣中頸城郡高田吳服町四百二十五番地
全支店	高知縣土佐郡南街ノ内浦戸町五十五番地	第一百廿四銀行	愛媛縣新居郡西條町二百五番地

第百四十四銀行	宮崎縣那珂郡飭麗阪敷村 百十四番地	日本銀行	東京府日本橋區新永代町
第百四十五銀行	全白杵郡延岡南町二百八 十八番地	全支店	大坂市攝津國東區大川町
第百四十六銀行	廣島縣廣島區中島新町四 十六番地	割引銀行	東京日本橋區本町三丁目
第百四十七銀行	鹿兒縣鹿兒島郡六日町二 十九番地	三井銀行	東京府日本橋區駿河町五 番地
全支店	大坂府大坂西區立賣堀南 通五丁目	全支店	大坂市大坂東區高麗橋二 丁目六十三番地
第百四十八銀行	大坂府大坂東區唐物町二 丁目廿五番地	全支店	京都市京都下京區新町通 六角
第百四十九銀行	函館函館區末廣町五番 地	橫濱正金銀行	神奈川縣下橫濱區南仲通 五丁目八十五番地
第百五十銀行	青森縣三月町八丁目八日町 十二番地	全支店	兵庫縣攝津國神戶區榮町 一丁目
第百五十一銀行	熊本明十橋川岸通三十九 番地	興立銀行	東京府日本橋區南茅場町 二十番地
第百五十二銀行	鹿兒島縣鹿兒島郡築町三 十番地	安田銀行	全日本橋區小舟町三丁目 十番地
全支店	大坂府大坂西區新町通四 丁目	相生銀行	全日本橋區村松町三十七 番地
第百五十三銀行	京都府上京區第二十二組 錦砂町二百八十五番地	菱川銀行	全日本橋區小網町二丁目 三番地
私立之部		川崎銀行	全日本橋區檜物町十四番 地

貯藏銀行	全日本橋區萬町一番地	田中銀行	全日本橋區阪本町七番地
明辰貯金銀行	全日本橋區大鋸町十三番 地	東濃銀行	全神田區岩本町二十一番 地
東京貯蓄銀行	全日本橋區新泉町一番地	木原銀行	大坂府攝津國大坂東區安 土町一丁目
東陽銀行	全神田區山本町二十八番 地	川上銀行	全東區備後町一丁目
東北銀行	全神田區末廣町十番地	逸身銀行	全東區備後町二丁目
貯金銀行	全日本橋區馬喰町三丁目 六番地	小田銀行	全西區新町通一丁目
日東銀行	全日本橋區囃殼町二丁目 十四番地	谷村銀行	全東區農人橋通二丁目
平松銀行	全日本橋區兜町三番地	久次米銀行	全西區宇和島橋北詰
壬午銀行	東京府日本橋兜町四番地	富岡銀行	全西區幸町四丁目
中井銀行	全日本橋區金吹町一番地	八王子銀行	全東區本町二丁目
東京貯錢銀行	全牛込區通寺町一番地	寅屋銀行	全南區順慶町二丁目
東海貯金銀行	全日本橋區檜物町十五番 地	三友銀行支店	全東區博勞町四丁目

式藏國

下總國 上總國 安房國

絹 諸織物 綿 漆器 玉細工 象牙細工 鼈甲 細工 團扇 煙草入 縫箔 紫染 綿繪 詩繪 煉火石 履 和唐紙 擬檀紙 烟草 鑄物 川越 平海苔 葱 蘿蔔 梨 桃 甜瓜 漬菜 石灰 鯉 鮭 白魚 蝦 蜆 海鼠 素麩 魚油 鱒 鰻 鮭 魚類 心太州 牡蠣 浪子 海苔 磨沙 鮑 魚類 心太州 牡蠣 浪子 紅花 茶 檜 烟草 魚類 鮑 蛤 鱒 糟 干鰯 魚油 雞 鶩 雞卵 牡蠣 馬 炭 薪 切石 蒟蒻 甜瓜 西瓜 細茶 味淋酒 海苔 栗 蒟蒻 甜瓜 西瓜

常陸國

相摸國

伊豆國

炭 鮒 鰻 雁 鴨 鮭 干温鮓 泥炭 鹽 鈹 子縮 大方紙 小杉原 彩雲紙 生糸 茶 烟草 硯石 硯 漆器 銅器 燧石 鮭 鮑 魚類 干鰯 眞珠 葛粉 箱根竹 梅干 鹽辛 水飴 薪 炭 山椒魚 蝦 華臍魚 鯛 鳥賊魚 海豚 外朝 柴胡 盆山石 秦野大根 紅花 鼠大根 江豚 海雀 根府川石 鮫 鮎魚 八丈紬 雁皮紙 葛粉 材木 薪 炭 山葵 黃楊 鯛 榮螺 鮑 水節砂 青海苔 砥石 鹿 竹 椿油 大蕪菁 水節砂 青海苔 砥石 鹿 角菜 心太州

甲斐國

生糸 紬紙 海氣絹 材木 葡萄酒 林檎 小梅 搗栗 枯露柿 梨 胡桃 駒 甘艸 黃連 紫草 水晶 磁石 雨畑硯石 猪胆 蜂蜜 蠟 漆 杉

駿河國

駿河細工 紙子 半紙 酢 漆器 蜜柑 莢 茶 椎茸 松露 松茸 甜瓜 蕨 不二苔 白子干 板 水晶 磁石 雨畑硯石 猪胆 蜂蜜 蠟 漆 杉

遠江國

葛布 塗物 木綿 琉球表 箒 蜜柑 線綿 茜根 納豆 和布 鮭節 鮪 鱈 紫根 松茸 蕨餅 椎茸 海苔 和布 鮭節 鮪 鱈 紫根 松茸 蕨餅

三河國

綿 木綿 酒 味噌 生糸 海鼠腸 温飩 煙艸

尾張國

白魚 串柿 干姜 雲母 砥石 碁石 御影石 綿 結城棧留 有松絞 鳴海絞 名古屋扇 常滑 燒陶器 七寶燒 鍋 小刀 赤味噌 藻魚 水

志摩國

鹿角菜 海帶 梨實 五色砂 心太草 海雲 天然碁 品 眞珠 瑪瑙 大根 海鼠 鹽鯨

伊勢國

津縵子 綿 松坂木綿 結 櫛 鯨尺 茶 萬古 燒白粉 染物模 菅笠 草履 烟草入 塗箸 時雨蛤 眞珠 牡蠣 青苔 伊勢鰻 防風 車渠貝 海蘿 和布 海帶 梅茸 申柿 紅花紙 素麵

伊賀國

山城國

大和國

鹿麩 麩粉 葛粉 人形 薯蕷 銀杏 鱈 藥種 杉丸 太
 曝布 油煙墨 團扇 合羽 漆紙 線綿 酒索
 清水燒 葦蒲草 白川石 砥石 燧石 刃土 刃物 筆
 木炭 硫黃木 藍 鯉 川鱸 川鱒 金銀箔 黒
 葡萄 柴栗 山椒 楊梅 慈姑 轉柿 豆腐 桃實
 瓜 茄子 乾菜 水菜 牛蒡 檉 柚 椎實 桃實
 茸 甜瓜 菜 絲瓜 林檎 橘 蕪菜 蘿蔔 越
 牙細工 白箸 草履 針 白粉 紅 棕 團扇 象
 織物 染物 茶 陶器 漆器 扇 人形 團扇
 藥 玉芻 石炭 磨沙 硫黃 白樺 冬瓜 燧石 芍
 陶器 松茸 烟草 砥石 白樺 冬爪 燧石 芍

河内國

和泉國

攝津國

近江國

木綿 干綿 白炭 平野 守口 漬 金剛砂 炭 葡萄
 蓮藕 白粉 雞卵紙 檜 撰糸 織物 綿 麻布 庖丁 鐵砲
 白粉 麥粉 小豆 熬魚 岡田 鯛 金魚 蛤 和泉
 日根野 小豆 熬魚 岡田 鯛 金魚 蛤 和泉
 石 蕃薯 芭蕉布 人形 葎繩 菅笠 紙子 土細工
 木綿 芭蕉布 人形 葎繩 菅笠 紙子 土細工
 燒物 烟管 麥藁 人形 葎繩 菅笠 紙子 土細工
 酒 酢 鮎頭 蕎麥 干瓢 西爪 銅釜
 布 燈油 酢 鮎頭 蕎麥 干瓢 西爪 銅釜
 魚 望潮魚 鳥具 干鰯 微塵 慈姑 硯 團扇 香
 附子 御影石 石 絹 晒布 蚊帳 麻布 疊縁
 米 大豆 小豆 絹 晒布 蚊帳 麻布 疊縁

美濃國

飛彈國

信濃國

布ヌ 糸イト 陶器ヤキモノ 竹タケ 算盤ソロバン 針ハリ 椀ワン 笠カサ 塗盆ヌリボン
 鳥子紙トリノコカミ 銅釜ナベ 藤行李フジコ 烟管キセル 圓座エンザ 墨スミ 温飩ウンドン
 蕎麥ソウ麦 苳母カヲ 青花紙アイガミ 柳厚紙ヤナギアツイタ 艾モグサ 屑藁クスマ 蘿蔔ダイコン 鱒マス
 鯉コイ 魚イサ 源五郎ゲンゴロウ 蝦エビ 蛭ヒル 諸子モロコ 鱒マス
 米コメ 紙カミ 硯石スズリイシ 冰魚ヒナ 眞綿マワタ 縮緬チリメン 羽重ハネダエ 緞子モツ 絹キヌ 麻アサ
 布ヌ 蚊帳カトヤツ 籐細工フシ 陶器ヤキモノ 庖丁ホウテイ 剃刀カミソリ 鋏ハサミ 縫針ヌイハリ 樗カヤ 實ミ
 岐阜キフ 提灯チヂン 箏ソウ 天蠶絲テンサシ 茶チヤ 藍アイ 干大根ホシダイコン 樗カヤ 實ミ
 蜂屋ハチヤ 柿カキ 生糸キイト 眞綿マワタ 山繭ヤマノ 蠶種カイコタネ 上田ウエダ 綿ワタ 麻布アサフ 楊枝ヤウジ
 材木サイモク 葛粉カヂ 搗栗カチグ 香茸コウジク 鱒マス 岩茸イワタケ 綿ワタ 麻布アサフ 楊枝ヤウジ
 烟州エンシュウ 甘草カンサウ 黑柿クロガキ 木細工キサイク 小梅コウメ 花漬ハナヅケ 申柿ウシハシ
 干蕨カンワラ 干瓢カンピョウ 蕎麥ソウ麦 蕨粉ワラビコ 陶器ヤキモノ 櫛クシ 冰餅コウリモチ 漆ウルシ
 熊胆クマタン 八目鰻ヤツメ 山生魚ヤマシウイ 鷹タカ 貉ムジナ 瑪瑙石マノウシ 漆ウルシ
 生糸キイト 新田絹ニウタキヌ 太物織フモノオリ 蠶種カイコタネ 白苧シラサ 漆ウルシ 煙草タバコ
 三度栗サンダクリ 白葱シロネギ 鯉コイ 盆岩ボンイハ 慈心鳥シシントリ 漆ウルシ 煙草タバコ
 生系キセイ 絹キヌ 團扇ウチハ 漆器ヌリモノ 椀木ワンキ 盆類ボンルイ 笠カサ 木綿モメン
 細工サイウク 川海苔カハヒ 大方紙オウホウシ 蕃椒トウガラシ 牛蒡ゴボウ 葱ネギ 麻アサ 人ヒト 檜ヒノ
 參マツ 艾モグサ 煙草タバコ 蠟石ロウシ 蕃椒トウガラシ 牛蒡ゴボウ 葱ネギ 麻アサ 人ヒト 檜ヒノ
 米コメ 雜穀サウコク 馬ウマ 生糸キイト 眞綿マワタ 油アブラ 八反織ハツダンオリ 川股カワマタ
 絹キヌ 紙カミ 精好セイコウ 相馬燒サウマヤキ 魚油イサアブ 籾ヒ 烟草タバコ
 半紙ハンシ 延紙エンシ 椎茸シイタケ 藍玉アイダマ 鹽シホ 鯉節コイホウシ 浮龜ウレカメ 干鮑カンパウ
 鰻ウナギ 蠟燭ロウソク 生糸キイト 文字摺絹モンジズリキヌ 吳朗丸ゴラウマル 紬ツムギ 絹キヌ

上野國

下野國

磐城國

岩代國

日本全國物産表

漆器ヌリモノ 蠟燭ロウソク 生糸キイト 文字摺絹モンジズリキヌ 吳朗丸ゴラウマル 紬ツムギ 絹キヌ
 烟州エンシュウ 甘草カンサウ 黑柿クロガキ 木細工キサイク 小梅コウメ 花漬ハナヅケ 申柿ウシハシ
 干蕨カンワラ 干瓢カンピョウ 蕎麥ソウ麦 蕨粉ワラビコ 陶器ヤキモノ 櫛クシ 冰餅コウリモチ 漆ウルシ
 熊胆クマタン 八目鰻ヤツメ 山生魚ヤマシウイ 鷹タカ 貉ムジナ 瑪瑙石マノウシ 漆ウルシ 煙草タバコ
 生糸キイト 新田絹ニウタキヌ 太物織フモノオリ 蠶種カイコタネ 白苧シラサ 漆ウルシ 煙草タバコ
 三度栗サンダクリ 白葱シロネギ 鯉コイ 盆岩ボンイハ 慈心鳥シシントリ 漆ウルシ 煙草タバコ
 生系キセイ 絹キヌ 團扇ウチハ 漆器ヌリモノ 椀木ワンキ 盆類ボンルイ 笠カサ 木綿モメン
 細工サイウク 川海苔カハヒ 大方紙オウホウシ 蕃椒トウガラシ 牛蒡ゴボウ 葱ネギ 麻アサ 人ヒト 檜ヒノ
 參マツ 艾モグサ 煙草タバコ 蠟石ロウシ 蕃椒トウガラシ 牛蒡ゴボウ 葱ネギ 麻アサ 人ヒト 檜ヒノ
 米コメ 雜穀サウコク 馬ウマ 生糸キイト 眞綿マワタ 油アブラ 八反織ハツダンオリ 川股カワマタ
 絹キヌ 紙カミ 精好セイコウ 相馬燒サウマヤキ 魚油イサアブ 籾ヒ 烟草タバコ
 半紙ハンシ 延紙エンシ 椎茸シイタケ 藍玉アイダマ 鹽シホ 鯉節コイホウシ 浮龜ウレカメ 干鮑カンパウ
 鰻ウナギ 蠟燭ロウソク 生糸キイト 文字摺絹モンジズリキヌ 吳朗丸ゴラウマル 紬ツムギ 絹キヌ

土佐國

欄 籠甲 半夏 蜂蜜 蜜蠟 晒柿 陶器 鯉節
 諸紙類 鯉節 鯨 雞卵 茯苓 五倍子 砂糖
 生糸 生絹 太布 烟草 樟腦 縮緬 木綿
 檜材 檜綱 椎茸 蕨粉 人參 蜂蜜 蜜柑
 檜材 檜綱 椎茸 蕨粉 人參 蜂蜜 蜜柑
 瑪瑙 紅白珊瑚珠 硯石 荒砥石 眞珠 雲
 石 檜材 檜綱 椎茸 蕨粉 人參 蜂蜜 蜜柑

筑前國

米 博多織 綿木綿 檀蠟 鹽釜 茶 練酒 菜
 蛤 鮑 雞卵 蜂蜜 蜜蠟 牛房 長西瓜 鯨 海鼠
 米 諸紙類 薄茶 藍 紅花 牛房 蜜柑 河海
 米 鳥坂海苔 砥石 燧石 檀實 鹽 茶 陶器

筑後國

油粕 炭 大竹 葛粉 大根 銀杏 小倉海苔
 海鼠 小鯛 硯石 絞木綿 生糸 陶器 七島麩
 米 大豆 竹木 梅 蜜柑 壘表 酒 嬰粟子 鈎藤
 鹽 蜂蜜 梅 蜜柑 壘表 酒 嬰粟子 鈎藤

豐後國

陶器 煙草 疊表 龜甲 細工 木綿 砂糖漬 鰯
 臘子 鮑 海茸 蓮芋 西瓜 葡萄 蘿蔔 雲丹
 天草 海苔 鮪 石灰 種油 油糟 樟腦 野大根
 米 雜穀 菜種 晒葛 素麵 芋莢 野大根

肥前國

煙草 煙管 砂糖 水禪寺 海苔 菊地海苔
 班竹 砥石 樟腦 茶 半切紙 生糸 蠶種 生
 材木 鯉節 樟腦 茶 半切紙 生糸 蠶種 生
 蠟 漆 砂糖 烟草 野駒 鮑 水晶 早稻 椎

日向國

は

も

徒

ま

べし
つらし
ふかし
まるじ
あし
あさし
の
たけし

ま

うかれし
たのし
こめし
はづかし
さびし
ひさし

き

ありき
たりき
きこへき
いひき
なかりき
みき
しりき
かへりき

に

ありにき
にき
かへりにき
たへにき
くれにき
ちり

て

いひてき

おもひてき

き

そてめてき

かせてき

す

り

あり
をり

せり

あり

たり

けり

めり

けり

さけり
しけり
いけり
かけり

せ

ふせり
うつせり
てらせり

て

たてり
かてり
まてり

へ

いへり
にほへり
思へり

り

あへり
とへり
あらへり

め

すめり
しつめり
うめり

り

汲めり
すめり
しぼめり

れ

あれり
つもれり
ちれり

り

こもれり
すめり
よれり

かなにかひ

ぬ

ありぬ
来ぬ
まといぬ
かへりぬ
しりぬ

つ

いひつ
見つき
つ思ひ
くらしつ
あかりつ

す

爲

て来

す

知

はす
思はす
聞きす

る

しらる
はいる
きたる
さかる
どはる
わする

く

か
く
あ
む
つ
く

す

ま
か
す
の
す
お
こ
す

つ

め
た
つ
は
い
づ
つ
お
す
つ

し	に	し	し	さ	さ	ど
くちりにし れにしし	ありにし ちりにし	ありし たりし 思ひり	ありにし 見し いひし	嬉しき かしき 恥しき	たのしき わびしき 苦しき	べなきのどけき うなきのどけき わろなきのどけき
かへりにし	たへにし	さかりし 見し わかりし	さかりし 見し わかりし	戀しき をしき 久しき	戀しき をしき 久しき	何
る	け	める	たる	せる	る	ぬ
しける	さける	ける	ける	ある	ある	ある
いける	ゆける					
かける	さける					
て	い	そ	め	て	し	お
そめてし	ひてし	めてし	めてし	めてし	めてし	もひてし
い	ひ	そ	め	て	し	や
い	ひ	そ	め	て	し	や

す	く	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ
あつす ちらす	とく こく	うへ 居植	あがる かくる	見ゆ きゆ	たのむ さかむ	そふ こふ	たいぬ かさぬ
わたす	ひく	うへ 飢	みだる しをる	おまひゆ さかゆ	さそむ さそむ	おどふ おどふ	つかぬ つかぬ
らん	ん	る	む	ふ	つ		
けん	せん	ちる	つす	そふ	こか		
あん	せん	ちる	す	おふ	は		
てん	せん	ちる	む	あふ	あ		
	せん	ちる	か	は	わ		
	せん	ちる	し	は	わ		
	せん	ちる	む	は	わ		

せ せせる せせる せせる
うのせる のこせる せら

て たてる きてる きてる
かてる うてる はてる

へ いへる 思へる 問へる
たへる あへる ちかへる

め さめる しづめる 生る
くめる すめる しほめる

れ ちれる つもれる ちれる
こもれる さまされる ふれる

ぬ ちりぬる ちへぬる ちりぬる
かへりぬる ちへぬる

つ いひつる 見つる きいつる
思ひつる かへらしつる
ちりつる

す 句はする きする 見する
知らする 思はする 聞する

る ちる いはる ちる
わする ちる いはる ちる

ふ そふる こふる おふる
かぞふる ちかからふる

む たのむる ちかむる とむる
さむる とむる うらむる

ゆ 見ゆる きこゆる さか
ひゆる きこゆる たゆる おも

る ちかる かくる ちか
しをる しくる やつる

う うへる かとる やうる

け さむき ちかけれ のとかけれ
よむき ちかけれ つらかけれ
たかけれ 深かけれ 浅かけれ

け

く とくる つくると ちくる
かくる たむくる あくる

す まかする よする おこする
やする のする うする

つ たつる いづる すつる
めつる はつる おつる

ぬ いぬる かぬる しぬる
たつぬる かさぬる つかぬる

ころ

れ 知らすれ 思はすれ 聞すれ	つ 句はすれ きすれ 見すれ	よ れ	ら れ	さ れ	れ り つ れ	つ 云つれ 見つれ 聞つれ	れ か へ り ぬ れ	ぬ か へ り ぬ れ	れ こ も れ	れ あ れ	れ あ れ	ね	か し 見 し か	れ け し 久 は く し づ け れ
					く ら し つ れ		た へ ぬ れ	ま さ れ	ふ れ	つ も れ	を れ		か か	れ れ れ
			ぬ れ	く れ	あ か		ま と ひ ぬ れ			ち れ			あ か り し し か	う ら わ た の し し け れ

れ め つ れ	め た つ れ	れ す や す れ	す ま か す れ	れ く か く れ	く と く れ	れ る わ す れ	る 知 ら る れ
は つ れ	い つ れ	の す れ	よ す れ	た む く れ	つ い く れ	開 か る れ	開 か る れ
お つ れ	す つ れ	う す れ	お こ す れ	あ く れ	あ へ れ	と は る れ	ま と は る れ

た れ	せ れ	れ	ね	か し 見 し か	れ け し 久 は く し づ け れ
け れ	あ れ	を れ		あ か り し し か	う ら わ た の し し け れ

れ め く め す め れ	れ へ 句 へ れ	れ て か て れ	れ せ う の つ せ れ	れ け し け れ	め れ
し づ め れ	あ へ れ	う て れ	あ せ れ	い ゆ け れ	
し を め れ	あ ら へ れ	は あ て れ	か せ れ	か さ け れ	

ぬ	いぬれ	かぬれ	しぬれ
たつぬれ	かさぬれ	つぬれ	
ぬれ			

ふ	そふれ	こふれ	おふれ
どふれ	あからふれ		
かそふれ			

む	たのむれ	あかむれ	とむれ
どむれ	うらぬれ	さむれ	

ゆ	見ゆれ	きこゆれ	さか
ひゆれ	きゆれ	たゆれ	たも

る	あかるれ	かくるれ	やつるれ
しるるれ	くるるれ	み	

う	うれ	うへれ	すうれ

け	とさけ	こゆけ	ひさけ
あらせ	のこせ	うつせ	

て	たかて	まほて	かかて
見かて	こほて	はかて	

へ	いとへ	ねもへ	あらへ

め	しつめ	すめ	かあしめ
くめ	つめ	たのしめ	

○は 徒 へたゞと記せるは辭のあきを今かりに

らめ せめ ちめ てめ 徒といふ は も はこそ

そや にくらへれば は も は輕き故に重かる時はこそ

ぞや の格に従ふ也上に こう そのや 何はもあどいふ

そ の や 何 の 何はあに あど あず

いかに いかで いかい いづく いづれ いく たれ

たがの類ひ皆同ト や は所謂うたがひの や あり の

は春の目 秋の夜 あとあふ常の の とはかく也 月のかく

る、 人のつれあさ さど下の用語造意の及ぶ の にて句を

たて、毛下へおくるさり ころの下の けれ しけれ 常のけ

れとは別に「けり」「ける」と轉ずる事あり○手示遠波のことは容易述つくしがたければ委しく知らんには其の師につきて尋ねべし

●女子用文章

年始の文

わら玉の春の侈めてたさいつかたもあし侈事に壽なり其はとみち様侈さもしに侈としなされ悦入り猶ことしよりわ思しめす儘の侈事と幾千代かいらぬ侈ことぶき申つかはしまつはめてたくし

●七種の文

七種野侈しうきをりふし空も長閑にありなり恵方まいりいたし野邊のわか菜のみはやし筆とり誘申はまじし

○三月節句の文

桃の侈節句めてたく存なり此花庭に咲まいらせいつのとしよりもさかり故五もし様皺の侈響應猶くやあきかつらのなかき侈遊とも數く送り此方はをのみはかりいとさらくしきさとのみし

七月の文

七夕の侈しうき雙星のいく秋かはらぬあふせの數くめてたく思ひなりかりにふれたる草花者露るそめたる梶の歌する人有しことやとそもし様あらはと侈めもしに入なり恥しくそし

歳の暮の文

こよあふ長閑あるとしの暮にてことさら無く侈つそうれしく候はんとさもしいたしなりこの小袖我身したてなりま例のことく侈めし下されかつし祝義迄に進なりめてた

挫、長短、節奏、各ソノ致ヲ極ムルハ句法也、點綴關鍵、點綴ハ文字ノ

リ、關鍵ハ文字、金石綺綵ノ如ク、各其造ルヲ極ムルハ字法也、到底善ク

底善ク（ツガイメ）ヲ合セ、又カリ無ク書クヲ云フ也、

◎篇法ニ「分間法」ト云フコト有リ、分間法ハ左ノ比例ヲ以テ一篇ノ文ヲ頭、腹、尾ノ三様ニ書キ立ツルコトナリ、

〔頭〕ハ文ノ發端ニシテ又起手或ハ起ト云フ、大文ナレバ腹ノ五分ノ腹ノ五分ノ三分ノ三トス、而シテ其書キ方ハ、緊シクノ重キヲ好トス

〔腹〕ハ文ノ胴胞ノ處ヲ云ヒ、其ノ始ノ處ヲ胸ト云ヒ、終リノ處ヲ腰ト云フ、頭ノ五倍トス、而シテ其胸ハ爽カナランコト欲シ、中ハ滿チテ曲折多カラシコト欲シ、其腰ハ健カニシテ快カラシコト欲ス、

〔尾〕ハ文ノ終リニシテ全文ノ閉シメノ處ナリ、故ニ又之ヲ結ト云フ、頭ノ三分ノ二トス、而シテ其書キ方ハ、手輕クシテ意味十分シ、駿馬ノ坡ニ駐ル如ク尙ホ奔騰セントスル勢アルヲ好トス、

此ノ如ク大畧全篇ヲ三部ニ區別シテ取締ヲナスヲ、篇法ノ大主意トナス、又左ニ舉グル如ク、之ヲ六部ニ小別シテ〔體段六法〕ト名ツク、

〔起〕即チ頭ニシテ發端ナリ、

〔承〕詩ノ承句ノ如シ、起ノ意ヲ承テ上文ニ續クヲ云フ、

〔鋪〕鋪ハ布ナリ、承ノ次ギニ於テ、明白ニ詞ヲ布置スルコトヲ云フ、

〔叙〕鋪ヲ受ケテ事理ノ次第ヲ敘述スル處ヲ云フ、

〔過〕叙ニ次ギテ詩ノ轉句ノ如ク、上チ承ケ下ニ續ク處ニ於テ、詞ヲ一轉スルヲ云フ、又之ヲ過接或ハ過渡ト云フ、上ノ四法ハ、分間法ノ胸腹尾ニ當ルナリ、

〔結〕即チ尾ナリ、詩ノ結句ノ如ク、全文ノトシメヲ爲ス處ナリ、

此ノ六法ハ、頭腹尾ヲ小別シテ、詳カニセシマデニシテ、格別ナルヲハ無ク、夫畧此ノ意ヲ以テ、文ヲ綴ルヲ好トス、サレトモ、文ノ長短ハ一定セル者ニ非ルヲ以テ、何レノ文モ、皆此ノ六法ヲ備フ可キ謂ナシト雖モ、起結ノ二法ハ、必ズ用非ザルヲ得ザル者トス、

◎章法ノ中ニテ必要ナルハ、節ト段トノ分割ナリ、サテ、一章トハ、一段ノ文ヲ云フナリ、「段」トハ、一篇ノ小別ナリ、凡ソ文ヲ作ラントスルニハ、其事ヲ吟味シテ、其大主意ヲ若干ニ別チ、豫メ次第ヲ極メテ、各ノ一意ヲ一束トナシテ書ザレバ、文意前後ニナリ、混雜シテ分ラヌナリ、段トハ此ノ一意ヲ一束ニシタル間ヲ云フ、故ニ一篇ノ文章ハ數段ノ文ヲ累子テ、織立タル者ト知ルベシ、「節」トハ、段中ノ小別ニシテ、段中ノ各ノ一意ヲ次第シ、各一節中ニ一束ニ書ク者ナリ、畢竟文章ハ、字ヲ累子テ句ヲナシ、句ヲ

累子テ節ヲナシ、節ヲ積ミテ段ヲナシ、段ヲ積ミテ篇ヲナス者ナレハ、此ノ積ミ累子方ニ巧拙ノアルヲ故、文ニモ亦巧拙ノアルヲ也、サレバ、此レニ注意スルヲハ、文ヲ作ルノ第一ノ要件ナリ、詳ニ本文ノ挿註ニ示ス所ヲ翫味シ、其法ヲ熟知スベシ、◎句法ハ、作文中ノ基根ニシテ、其法極メテ多シ、今其梗概ヲ説示ス可ト雖モ、一小冊子ノ能ク詳ニスル所ニ非ズ、初學ノ士、本文ノ挿註ニ示ス所ト參考シテ、之ヲ悟ルベシ、〔長短〕句ハ長五、短句ヲ取り雜シテ、整齊ナル處ト、不整齊ナル處アル様ニ作ルヲ好トス、唐ノ韓退之ノナドハ、長短句ヲ自在ニ用ヒシ人ニテ、世ノ中ニ韓退之ノ跛足ト目セリ、サテ短句ハ、一字ヨリ二三字ニ至リ、長句ハ三四十字ニ至ルナリ、短句ハ枯單ナリ易ク、長句ハ凡弱トナリ易キ者ニテ、初學ニハ、難事ナレトモ、古人ノ用法ヲ翫

味ズレバ、自然ニ知ラル、也、總テ長短句トモニ、警拔ナル句ヲ用ウベシ、

〔抑揚〕句ノ抑揚トハ、アゲサゲノコトニテ、抑ハ、其事其人其

物ヲ賞メズシテ抑ヘサゲル也、揚ハ、ホメアゲル也、總テ文ハ抑揚ナケレバ面白カラズ、故ニ十分ニ抑揚ヲナ

スコナリ、

〔波瀾〕水ノ波ノ打奇ルガ如ク、文ヲ進メ歩マス句ヲ波瀾ト

云フ、又波瀾ノ少ナキ者ヲ〔小波〕ト云フ、

〔照應〕トハ、前文ニ出タル文意ヲ、後ニ至リテ再ビ拈出シ、

前後相映ゼシメ、雙方ヨリ相喚ビ、相答フル如ク書クコト

ナリ、

〔映襯〕ハ、實事ヲ引キ出シ、前文ノ實事ヲ照ラスヲ云フ、又

反襯ト名ツク、

〔頓挫〕上ヨリ波瀾ヲナシ説キ來レル詞ヲ、頓ニ一句ヲ以テ之ヲ挫ク也、

〔曲折〕ハ詞ヲ正直ニ説カズ、故ト折リ曲ゲテ、婉シク書クコトヲ云フナリ、

〔轉折〕又ハ轉換トハ、文意ノ移リ變ル處ノ折ヲ云フ、

〔頂針〕トハ、上句ノ字ヲ下句ノ初メニ頂キテ進ムヲ云フ、假令ハ、是ヲ無禮ト謂フ無禮ハ云々ト云フガ如シ、

〔草蛇灰線〕ハ、或ハ伏脈、伏線ナド云フ、文章中後ニ云ハント欲スル事アレバ、其遙カ前ヨリ、其事ノ種子ヲ蒔キ、

預メ伏勢ヲシカケ置クコト也、

〔斜挿〕トハ、前文ヨリ次第ニ來リタル文中へ、他事ヲ斜メニ

插シ、後ニ云フコトノ突出セザル爲メノ閑語ヲ云フ、

〔繳〕トハ、中途ニテ上文ヲ一束ニカラミ置ク處ヲ云フ、

〔幹旋〕トハ、議論文ニ多ク用ル所ニシテ、虚字ヲ以テ（クル
リ）ト云ヒ旋ナリ、

〔急脈緩受〕トハ、上文ニ短句ヲ以テ、勢急ニ説キタル後チ、
長句ヲ以テ之ヲ受ケ、文ノ調子ヲ緩クスルヲ云フ、

〔緩脈急受〕トハ、上文長句ニテ勢ヒ緩ク來レルチ、頓ニ短句
ヲ以テ之ヲ受ケ、文勢ヲ急ナラシムルヲ云フナリ、

◎字法ハ、文字ヲ吟味シ鍛鍊スル也、其法大畧左ノ如シ、而シ
テ文章中ニハ、成ルベク俗字俗語ヲ用井ヌヨウニ爲スベシ、

〔諧音〕文ノ聲音ノ調子ニヨリテ字ヲ下ス也、調子ノ揚ル
ベキ處ニハ、響ノ多キ字ヲ用井、調子ノ低處ニハ、音ノ
低キ字ヲ用井ルナリ、

〔審意〕文意ニ由テ字ヲ下ス也、文意明白ナル可キ處ニハ、明
白ナル字ヲ用井、輕ス可キ處ニハ、輕キ字ヲ用井、暗ス

可キ處ニハ、不了ナル語ヲ用井ルノ類ヲ云フ、餘ハ推シ
テ知ルベシ、

〔襲古〕凡ソ字ハ、古人ノ嘗テ用井タル字ニテ、今人ノ未ダ用
井ザル字ヲ求メ、新奇ナレトモ怪僻ナラヌ者ヲ用井ルチ
好トス、

〔立意四法〕

〔景〕天文地理物象チ皆ナ景ト云フ、景ヲ寫スニハ、文ノ氣チ
養チ以テ、第一ノ要件トナスナリ、

〔意〕議論ナリ、想像ナリ、皆ナ意ヨリ出ヅ、意ヲ寫スニハ、理
ヲ第一トス、

〔事〕目前ノ實事及ビ故事ハ皆ナ事ト云フ、事ヲ寫スニハ、其
景ヲ寫スベシ、事、景ノ上ヨリ出ヅルルキハ、眞實ニ見ユル
ナリ、

〔情〕人ノ喜怒哀樂愛惡欲ノ七情ヲ情ト云フ、情ヲ寫スニハ、

先ツ意ヲ寫スベシ、情、意ヨリ出ヅルキハ、深切ニ聞ユル者ナリ、

大抵文ハ右ノ四ノ者ヨリ出ザル者ナシ、故ニ文意ヲ考ヘ出スニハ、必ズ此レニ由ラザル無シ、故ニ其文題ノ宜シキ處ヲ量テ、此中ノ一ヲ以テ主トナシ、他ノ三ヲ其中ニ單ルナリ、文ヲ作ルニ景ヲケレバ、枯レテ光燄ナク、意ヲケレバ、粗糲ナリ、事ナケレバ虚トナリ、情ヲケレバ、誣トナル也、

〔養氣八法〕文ニ氣ト云フアリ、氣トハ氣象ノ一ニテ、此ノ氣ノ盛衰ニヨリテ、作ル所ノ文章ニ自然品格ノ高下アリ、故ニ假令ヒ字句體製ハ其妙ヲ極ムト雖モ、氣象ノ賤キハ、文モ亦品格高キヲ得ズ、左ニ養氣ノ法ヲ示サン、學者宜ク此法ニ由テ文氣ヲ長ズベシ、

第一 朝廷、宗廟、聖賢ノ文ニハ、其氣宜ク肅ナルベシ、

第二 大山、長河、英雄、豪傑、軍旅ノ文ハ、其氣宜ク壯ナルベシ、

第三 山林、隱逸、神仙ノ文ニハ、其氣宜ク清ナルベシ、

第四 宴樂、歡娛ノ文ニハ、其氣宜ク和ナルベシ、

第五 神怪、豪俠ノ文ニハ、其氣宜ク奇ナルベシ、

第六 宮室、園囿、臺榭ノ文ニハ、其氣宜ク麗ナルベシ、

第七 古ヲ懷ヒ、或ハ古跡、或ハ上古ノ事ヲ記スル文ハ、宜ク

古ナルベシ、

第八 高ニ登リ遠ヲ眺ムノ文、及ビ大功業ノ文ハ、其氣宜ク遠ナルベシ、

〔文章之病弊〕文ノ病弊トハ、文ノ疵ヲ云フ、左ニ列記スルハ最モ其病弊ノ著大ナル者ナリ、學者宜ク慎ミテ之ヲ避

クベシ、

〔失體〕 文ノ體製ヲ失フヲ云フ、假令ベ記事ノ題ナレトモ、文ハ

記事文ニ非ズ、論文ノ題ニシテ、論文ニ非ルガ如キ是也、

他ハ類推スベシ、

〔突出〕 前文ニ應ズル處ナク、突然トユカリ無キ他事ヲ出ス

コトヲ云フナリ、

〔闕暢〕 文意ノ不明了ニシテ、通暢セザル文ヲ云フ、

〔淺露〕 又之ヲ露骨トモ云フ、文意フカ、ラズシテ底意ヲア

ラハシ、骨出テ味ナク、含蓄セル所少ナキヲ云フ、

〔重複〕 少シモ變化スルコトナク、前文ト同シキ字句、或ハ文意

ノ再ビカサナリ出ヅルヲ云フナリ、

〔陳腐〕 フル臭キコトナリ、文意若クハ字句ニ、新奇ナル處ナキ

ヲ云フ、

〔板〕 變化ノ無キコトナリ、字ヲ下スニ變化ノ活用ナク、或ハ句

ノ音調長短同一ニシテ、變化セザルヲ云フ、

〔浮誇〕 文意ニ沈着老實ナル處ナク、飾リ多ク、ウハ調子ナル

ヲ云フ、

〔標竊〕 古人ノ字句文意ヲ變化スルコト無ク、ソノ儘ヌスミ用

井ルヲ云フナリ、

〔龍頭蛇尾〕 一篇ノ文章中ニ於テ、發端ヨリ大ソウニ書キ立

テ、後半ニ至リテ、次第ニ文氣ノ衰へ振ハザルヲ云フ、

〔起手八法〕 凡ソ文章ノ發端ヲ書キ起スニ八種ノ法アリ、之ヲ起

手八法ト云フ、學者宜シク此法ニ依テ、筆ヲ下スベシ、

則チ左件ノ如シ、

〔問答〕 自問自答ヲ以テ端ヲ發ス

〔頌聖〕 聖德ヲ頌美シ以テ端ヲ發ス

〔叙事〕 實事ヲ以テ端ヲ發ス シツシ 〔原本〕 起源ニ溯リテ端ヲ發ス キケン サカンボ

〔冒頭〕 前書ヲ以テ端ヲ發ス カリモウ 〔破題〕 題意ヲ説テ端ヲ發ス ダイイ トキ

〔設事〕 事ヲ假設ケテ端ヲ發ス カキモウ 〔抒情〕 真情ヲ抒テ端ヲ發ス シンジキウ

〔結尾九法〕 文ノ結尾ニ亦九法アリ、學者其宜シキチ度テ之ヲ應

用セバ、文勢收マラザルノ憂ナシ、則チ左件ノ如シ、

〔問答〕 發端ニ問答ヲ以テ初マル文ハ、亦問答ヲ以テ結ブ也、 モンダウ

〔張大〕 題ノ大ナル文ハ、其大サニ應ジテ結尾ヲ張大ニスル ケツヒ チヤウダイ

也、

〔收斂〕 題中ノ意味多端ニ別レルキハ、漏ラサズシテ盡結 ダイチウ モ コトク

ブ也、

〔會理〕 題中ノ道理ヲ、正シク説キ明カシテ結ブナ云フ、

〔叙事〕 發端ニ叙事ヲ以テ初マル文ハ、亦叙事ヲ以テ結ブ也、 チヨウシ

〔設事〕 題中ニ事ナキチ、假リニ事ヲ設ケテ起リタル文ハ、亦

事ヲ假リ設ケテ之ヲ結ブナリ、

〔抒情〕 發端ニ真情ヲ抒テ起リシ文ハ、亦真情ヲ抒テ之ヲ結 シンジキウ

ブ也、

〔要終〕 事ノ終リアランコトヲ要シテ之ヲ結ブナリ、 オハ エウ

〔歌誦〕 亂辭賦ノ如チ以テ結ビ、或ハ詩若クハ歌ヲ以テ之ヲ ランジキウ

結ブナリ、

○以上論述セシ諸法ハ、皆ナ和漢文ニ通シテ之ヲ用ウ可シ、サテ ロンシユツ

文章ノ法則ハ、和文ニテモ漢文ニテモ、大ニ異ナルコトハ無シト雖 ワカン

モ、漢文ヲ學ブニハ、漢土ノ語法ヲ熟知セザルキハ、文字上下ニ シユクチ

顛倒シ、文意通ゼザル者ナリ、其故ハ邦語ト漢語トハ、其原本同 タンドウ

シカラザルヲ以テ、語法自ラ異ナレバ也、今其語法ノ異ナルコトヲ ハツゴ

知ラント欲セバ、漢文ヲ讀ムニ、顛倒點ヲ施サ、レバ、其意味ヲ テンドウテン

會得セザルヲ見テ知ル可シ、 クワイトク

〔漢土之語法〕漢語ハ動詞ヲ先シ、實名詞ヲ後シ、上ノ動詞ニテ
 次第ニ下文ヲ支配スルノ例ナレトモ、邦語ハ實名ノ詞ヲ先ニシ、動
 詞ヲ後ニシ、最後ノ動詞ヲ以テ、次第ニ上文ヲ支配スルノ語法タ
 リ、正ニ漢語ト相反スルヲ見ルベシ、故ニ漢語ハ、邦人ヨリ見レ
 バ逆語ナリ、
 此ノ如ク漢語ノ、逆語ナル故ニ、漢文ヲ作ラシニハ、文字ヲ邦語
 ノ逆ニ置キ、先ニ云フ可キヲ後ニ云フ様ニナレバ、大抵ハ文
 字ノ顛倒ハ無キ者ナリ、尙ホ詳カニ之ヲ云ハシニ、(二年無レ改ニ
 於父之道)可レ謂孝矣)ト云フ二句ヲ、邦語ニ改ムルキハ、(三
 年父之道)トツ、キ(改無)トツ、キ、又(孝謂可矣)ト順ニツ、ク
 ナリ、此ニテ邦語ノ反ナルコトハ明白ナリトス、
 又漢文ニハ、詞ノツ、クト、切ル、トニ由リテ、文字ノ居ヨウヲ
 變ズルコトアリ、左ノ例ニ由テ之ヲ悟ル可シ、

有ニ以テ知レ 得ニ以テ聞テ 可ニ皆ナ去ル 以上ハ下ニツ、ク詞也
 以テ有レ知ル 以テ得レ聞テ 皆ナ可レ去ル 以上ハ上ニツ、ク詞也
 此ノ如ク意味ハ、大ナル差ナシト雖モ、有以トツ、ケルキハ、以、
 字ハ下ノ知ノ字ニ續キ、以有トツ、ケルキハ、以ノ字ハ其上ニア
 字ニ續クコトニテ、下ノ知ノ字ニハ續ガザル也、餘ハ類ヲ以テ推知
 大ベシ、
 又前ノ例ト相似タレトモ、初學ノ解ニ苦シム者アリ、今其一例ヲ舉
 ゲンニ、(不_レ敢_テ言_ハ)ト(敢_テ不_レ言_ハ)ト二語ノ如シ、邦語ヲ以テ之
 ヲ讀メバ、兩ナガラ(敢_テ言_ハズ)ト讀ミ、少シモ異ナル處ナケレ
 ト、文字ノ上ニテハ、(不_レ敢_テ)ト(敢_テ不_レ)ノ差アルヲ以テ、意味ニ於
 テ異ナラザルヲ得ザル也、上文ニモ云ヘル如ク、漢土ノ語法ハ、
 上ヨリ次第ニ下ヲ支配スル例ナルヲ以テ、詞ノ動キハ常ニ上ノ
 詞ニアリ、文字ノ居ヨウハ、千變萬化スレトモ、皆此規則ノ外ニ漏

ル、コナシ、左ノ解釋ニ依テ之ヲ知ルベシ、

〔不_レ敢_テ言_ハ〕ハ、不_レノ字最モ上ニアリテ、下ノ敢言ノ二字ヲ

支配シ、此二字ノ動キヲ決定ス、敢_レノ字第二位ニアリテ、

下ノ言ノ字ヲ動キヲ支配シ決定セリ、故ニ言フコトヲ敢_テ

不_レト云フ義ナリ、

〔敢_テ不_レ言_ハ〕ハ、言_ハ不_レコトヲ敢_テツテスル義ニテ、敢_レノ字第一位

ニアリ不言_ハ二字ヲ支配シ、其動キヲ決定セル也、

斯ノ如ク解釋スルキハ、意義極メテ明白ナリ、(皆可)(可皆)(必

使)(使必)ノ類ノ如キ、皆之ヲ以テ推知スベシ、慎ミテ用法ヲ誤

ルコ勿_レレ、

〔作文秘訣〕初學ノ士、漢文ヲ作クランニハ、善ク古人ノ文ヲ讀

ミ、其語勢ヨリ文字ノ用法ニ至ル迄、密カニ吟味シテ自得スルヲ

第一トス、或ハ時ニ古人ノ文ニ摸倣シテ作ルベシ、之ヲ換骨奪胎

ノ法ト云フ、但シ古人ノ語法ト文ノ格式トヲ摸倣シテ、切ニ言語
ヲ摸倣スベカラズ、

◎宋ノ歐陽永叔ハ文章ノ名家ナリ、サレヒ、文ヲ作ルキハ、先ツ

之ヲ壁ニ貼シ、時々ニ竄定ヲ加ヘ、全文ニ一字ヲ留メテ置カザル

コト有シト云フ、サレバ、少年ノ作レル文ハ、タ、文字ヲ綴リ合セ

タルノミニテハ、佳文トナル故ナシ、宜シク再三自ラ竄定ヲ加フ

ベシ、之ヲ文ヲ鍛鍊スト云フ、作文ニ上達セント欲セバ、鍛鍊ノ

外ニハ更ニ術ナキ者ナリ、

◎漢文ヲ作ニハ、其法式甚ダ多シト雖ヒ、初學ハ餘リ法式ニ拘泥

セヌヲ佳トス、サレヒ、文字ノ意味用法ヲ誤リ、或ハ文字ヲ顛倒

誤置スルキハ、語ヲ成サズ文意通セザル故ニ、決シテ粗忽ニスベ

カラズト雖モ、法式ノミニ拘ルキハ、筆鋒退縮シテ自在ナラザル

也、故ニ東坡翁ハ少年ノ時ノ文ハ氣象崢嶸ニシテ采色絢爛ナ

ラシム須シ、漸ク熟セバ、乃チ平淡ヲ造ス、其實ハ平淡ナルニ非ズ、乃チ絢爛ノ極ナリト云ハレタリ、故ニ初メハ筆ニ任セテ、頓着ナク書キ散シ、自然ニ法式ノ外ニ離ヌヨウ心ガク可シ、是レ亦作文ノ秘訣ナリ、

〔評點ノ法〕凡ソ文章ニ圈點ヲ施スハ、讀ム者ヲシテ文中ノ絶佳ノ處文ノ主意、伏脈、照應、字眠ナドノ諸法ヲ、一目ノ下ニ、明白ナラシメント欲スルニ在リ、而シテ古人ノ定ムル處モ有レト、皆ナ小異アリテ同シカラズ、故ニ今左ニ示ス者ハ、此ノ書ニ施コセシ所ノ法ヲ舉ゲ、此書ヲ看ル者ヲシテ、挿註ト評點ヲ參看シ、以テ文法ヲ覺ラシメント欲ス、

◎◎◎◎此ノ評點ハ文章ノ絶妙ナル處ニ用井、或ハ字眼、篇中ノ主意、綱領ノ處、及ビ文字ノ奇絶ナル處ニ用ウ、
◎◎◎◎此評點ハ、文章ノ妙境及ビ伏脈照應、或ハ轉換斡旋ノ妙

ナル處ニ用ウ、

○○○○此ノ點ハ、文章ノ佳處ニ用ウ、
●●●●此ノ點ハ、文章ノ平佳ナル處ニ用井、或ハ重圈點ニ代用シテ、伏脈、照映等ヲ示スニ用ウ、

○●○○此ノ評點ハ、專ラ照應ヲ示スニ用ウ、
●●●●此ノ乙畫ハ、文章中ノ大段落ノ處ニ用ウ、
— 此ヲ截畫ト云フ、文章中ノ一節ノ下ニ之ヲ用ウ、

此ノ單畫柱ハ、文章中ノ姓名字號ナドヲ示スニ用ウ、
此ノ雙畫柱ハ、文章中ノ地名、郡名、國號ナドヲ示スニ用ウ、

〔文章確論〕初學作文ノ裨益ヲ謀リ、古賢ノ名言ヲ茲ニ輯録シテ、看者ノ參考ニ供ス、若シ能ク古人ノ意ニ通セバ、文章ノ進歩スルコト、豈ニ數篇ノ文ヲ起草スル儼ノ能ク及ブ所ニアランヤ、

宋ノ歐陽永叔曰ク、文ヲ作ルニ他ノ術ナシ、唯書ヲ讀ムヲ多ケレ
 バ、則チ文自然ニ工ナリ、又曰ク、文ヲ爲ルノ法ハ、唯熟スルニ
 在ルノミ、變化ノ態ハ皆チ熟スル處ヨリ生ズ、
 元ノ李塗曰、文章ハ須ク數行整齊セル處アルベク、須ク數行整齊
 セザル處有ベシ、意味ノ對スル處ハ、文却テ必シモ對セズ、意
 味必ズシモ對セザル處ハ、文却テ對スベシ、
 明ノ陳洪謨曰、文ハ體ヲ辨ズルヨリ先ナルハ、無シ體トハ、文體ナリ、
本文ノ各條下ニ詳
 カナ、體正シテ後ニ意ヲ以テ之ヲ經シ、經トハ、根本
 貫キ、辭シ以テ之ヲ飾ル、體ハ文ノ幹ナリ、意ハ文ノ帥ナリ、氣
 ハ文ノ翼ナリ、辭ヲ文ノ華ナリ、體ヲ慎マザレバ則チ文麗ル、意
 立タザレバ則チ文舛フ、理ノマナチ氣昌ナラザレバ則チ文萎ム、辭脩
 ラザレバ則チ文蕪ル、此ノ四ツノ者ハ文ノ病ナリ、是故ニ四病去
 テ文斯ニ工ナリ、

周濂溪曰ク、文章ヲ作ルハ、猶ホ詞狀ヲ理スルガ如シ、第一ハ事
 ニ本ツク、第二ハ情ヲタツヌ、第三ハ理ニ據リ、第四ハ例ヲ按
 シ、第五ハ斷決ス、事ニ本ツクトハ、題ノ意ヲ認メルナリ、情ヲ
 タツヌルトハ、來意ヲ明カニスルナリ、理ニ據ルトハ、正シキ
 チ守ルナリ、例ヲ按ズルトハ、事ヲ用ユルナリ、自己ノ意ヲ用
 斷決ストハ、題ヲ結ブナリ、五ノ者備ハレバ、詞ハ簡ニシテ切
 ニ明白ナルヲ貴ブ

●英和新國民大群書之序

高杉東一東行先生子也、夙治英學有對譯辭書之著、頃將上梓行世來
 謁余一言余當從游先生會藩國多難先生投筆而起專事戰伐威名震
 蕩海內東一幼失所特勵精就學遂能著斯編以資後學一文一武皆有
 功干邦家嗚乎先生逝矣二十餘年墓木將拱幽明途隔若先生有知則
 欣然曰兒也能繼吾志

田 中 光 顯

◎賀内國勸業博覽會開場ノ盛儀表

大久保利通

臣利通敬テ白ス、陛下獻聖至德ノ治、深ク民産ノ興隆ヲ慮リ爰、ニ内國勸業ノ博覽會ヲ開ク、維時明治十年八月二十一日、會場ノ建築成ルヲ告グ、貨物陳列完キヲ稟シ、鸞輅親臨開場ノ盛典ヲ舉グ、「伏テ惟レハ博覽會ノ効績タル、大ニ農工ノ技藝ヲ獎メ、殊ニ智識ノ開進ヲ資ケ、隨テ貿易ノ宏圖ヲ介ケ、以テ國家ノ殷富ヲ致ス、陛下獻聖至德ノ治、夙ク已ニ此典ヲ舉ルニ至ル、誠ニ偉大ノ功業ト云フベシ、」

退テ會場ヲ觀ルニ、陳列ノ品類殆ド四萬、品主ノ員數二萬ニ近シ其産出ノ佳製作ノ美、已ニ其業ノ獎勵ヲ徵ス、將來興隆殷富ノ期、果シテ立テ埃ツベキナリ、實ニ此民ノ黽勉ナル、能ク其奮勵ノ効ヲ表ス、陛下獻聖至德ノ治、蚤ク已ニ其徵ヲ得ル、臣民豈頌ヲ

奉ラザルベケンヤ、嗚呼斯ノ億兆幸ニ奎運炳時ニ遭ヒ、萬貨爛粲ノ場ニ遊ビ、觀覽以テ其智ヲ進メ、討究以テ其識ヲ伸ブ、孰カ感憤振興シテ、陛下獻聖至德ノ治ニ報フルヲ思ヒ、以テ不績ヲ贊セザランヤ、「臣謹テ會場區劃圖及ビ出品目錄ヲ奉呈シ仰テ獻聖至德ノ治ヲ頌ス

◎大政奉還ノ表

徳川慶喜

臣慶喜、謹テ皇國時運ノ沿革ヲ按ズルニ昔者王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平ノ亂、政權武門ニ移リシヨリ、祖宗ニ至リテ、更ニ寵眷ヲ蒙リ、二百餘年子孫相受ケ、臣今其職ヲ奉ズト雖也、政刑當テ失フモノ少ナカラズ乃チ今日ノ形勢ニ至リ候モ、畢竟臣薄徳ノ致ス所、懋懼ニ任ヘズ候、「況ンヤ當今外國ノ交際日ニ盛ナルヨリ、朝權愈一途ニ出テ申サズ候テハ、綱紀愈相立チ難ク候間、斷然從來ノ舊習ヲ改メ大政ヲ朝廷ニ奉還シ、廣ク天下ノ公

儀ヲ盡シ、聖斷ヲ仰ギ、以テ同心協力、共ニ皇國ヲ維持仕リ候ヘ
ハ必ズ海外萬國ト並立シ、對等ノ交際ヲ遂ゲ申スベシ候、臣慶喜
今日國家ニ盡ス所之レニ過ギズト存シ奉リ候、「猶ホ見込ノ儀モ
之レアレバ、申シ聞ベキ旨諸侯へ相達シ置候、之レニ依テ此ノ段
謹ンテ奏聞仕リ候以上慶應三年十月十四日臣慶喜誠惶誠恐頓首
謹言、

◎乞爲大藏理財修整航行米利堅上書
下二 中 上

伊藤博文

臣伏テ惟ルニ方今國運煥發英敏特達ノ士、彬々輩出、開化ノ進歩
駸々乎、前日ノ比ニアラズ、然リ而シテ治國ノ要務、亦隨テ增益シ、
忙官劇職、或ハ寢食ノ暇ナキニ至ル臣因テ之ヲ推思スルニ、其要
枚舉ニ違アラズト雖モ、理財會計ノ修整ヲ以テ、庶政ノ根軸ト
ス、「夫理財會計ハ、凡ソ事務ノ舉行ニ關涉ス、故ニ其方法施設可

否ニ從テ、利害得喪、全國ノ民庶ニ垂及ス其緊務タル因ヨリ言ヲ
俟タズ、抑國家ノ興廢ハ萬民ノ貧富ニアリ、而シテ萬民貧富ハ實
ニ財政ノ當否ニ依ル、是豈ニ深ク關心セザルヲ得ンヤ、方今羈政
專擅ノ餘弊、猶ホ未ダ全ク洗除セズ、就中金銀貨幣ノ位價紊亂
シ、物價ノ低昂頗ル紛離ヲ究メ、其禍害全國ニ及ビ、民庶生ヲ聊
セザルニ至ル、加之無根ノ紙幣ハ八千有萬兩天下ニ散在流布シ、
又更ニ贗摸ノ弊害ヲ生ズ、極救ノ方策殆ド將ニ如何スベカラザ
ルニ至ラントス、「是ニ於テカ、朝廷英邁ノ神斷ヲ以テ、新貨鑄造
ノ工ヲ興シ、亦紙幣改定ノ議ヲ決セラレ、其貨位ヲ糾定シ、物價
ノ平準ヲ得セシメ、其製造ヲ精緻ニシテ、贗摸ノ奸偽ヲ遏止スル
ニ至ントス、是乃チ今日ノ急務ニシテ、實ニ國家危安隆替ノ關涉
スル所ナリ、臣無似ト雖モ、職ニ此ニ從事ス、故ニ夙夜黽勉以テ、
其効ヲ奏シ、永ク萬民ノ幸福ヲ保存シ、以テ皇德ヲ不朽ニ傳ント

ス、是臣ガ焦思苦心、深ク今日ニ希望スル所ナリ、「然ニ才拙ニシテ事大且方法規畫ノ如キ、獨リ紙上ノ理論ヲ以テ臆斷スベカラズ、故ニ或ハ之ヲ書籍ニ考覈シ、或ハ之ヲ實際ニ徵シ、以テ其功驗ヲ監ミ、然ル後初テ可否得喪ノ理判然タルヲ得タリ、「臣頃日合衆國國債償却法、及ヒ紙幣條制等ノ書ヲ繙閱シ、其方法ヲ視ルニ、事理適實、官民共ニ其權理ヲ保存シ、相行ハレテ相悖ラズ維持約束實ニ明亮精確ニシテ、最モ準據トナスベシ、然ニ一班ヲ見テ、全體ヲ妄案スベカラズ、故ニ之ヲ實境ニ驗シ、而シテ其眞理ヲ採擇シ、以テ我邦今日ニ用ウルヲ有ントス、冀クハ臣ニ數月ノ暇ヲ賜リ合衆國ニ抵リ、凡理財ニ關スル諸法則國債紙幣及ビ、爲替、貿易貨幣鑄造ノ、諸件ニ至ル迄、面視親聽、更ニ推考參酌シテ、確然不拔ノ制ヲ設立セシメ、聊カ隆恩ノ萬一ニ報シ、開明ノ裨補タルヲ得セシメンコトヲ、臣惓歎ノ至ニ堪ズ、誠恐頓首、庚午

十月廿八日、大藏少輔臣伊藤博文

○雨中賞牡丹記

蒲生襲亭

園中牡丹盛ニ開ク、余友人兩三名ヲ招キ、酒ヲ置キ以テ之ヲ賞ス、紅ナル者、白ナル者、紫ナル者、澹紅ナル者、參差交加ハル、金粉嫩日ニ烘ケ、微風天香ヲ吹ク、既ニ細雨烟ノ如シ花房露ヲ含ミ、輕盈嬌ヲ呈シ、殆ド相語ント欲ス、「客杯ヲ余ニ屬シテ曰ク此花富貴豪奢、子ノ家風清白ニ稱ハザル也、余曰然ラズ、乃チ詩ヲ賦シテ曰ク、貧富元是在骨法、天公豈有愛憎私、無名野草容自賤、牡丹獨具富貴姿、我ハ愛花王無世態、縱在貧家也花披、雖無人爵、有天爵、清白富貴我何辭、「座客皆大笑、更ニ數杯ヲ傾ケ、醉態傀俄ス、天既ニ黃昏、雨益至リ、花房愈重シ、狼藉相傾キ、亦傀俄シテ醉態ヲ作ス矣、時明治庚辰穀雨ノ節也

○按山子傳

小笠原勝修

按山子ハ、隴頭ノ人ナリ、世々弓矢ヲ執テ田圃ヲ守ルヲ掌ドル、
田峻之ヲ薦メテ曰ク、田ニ草人アレハ則チ雀賊敢テ窺ハズ、圃ニ
藁夫アレバ、則チ鴉陣敢テ寇セズ、按山子ヲ用ヒテ、田圃ニ從事
スルヲ得バ、則チ南畝長ク、遺利ノ失無ラン、是ニ於テ勸農師其
言ヲ用ヒ、拜シテ隴頭ノ守テ爲ス、「按山子性寒暑ニ堪フ、毫モ撓
屈セズ、將ニ特典ノ賞有ントス、」
贊ニ曰、楠正成ノ金剛山ニ據ルヤ、草人ヲ用ヒテ以テ賊軍ヲ脅カ
シ、遂ニ回復ノ功ヲ奏ス、按山子豈其苗裔ナルカ、何ゾ其百折回
ラザルヤ、善ク其家ヲ世ニスル者ト謂フ可シ、

◎祭故議官松岡時敏靈文

二品有栖川熾仁親王

嗚呼世功名ノ士ニ乏シカラス而ノ其遭際榮顯、品節渝ハラズ、年
愈老テ朝廷ノ恩遇愈隆ナルモノ、蓋シ多キコナシ、常人ノ情才

ヲ恃ミ、藝ニ誇リ、己ガ分ヲ守ラズ、其嘗テ顯職ニ任ジ、物望アル
モノト雖モ、一朝ニシテ恐テ懷キ、快々トシテ去ル、或ハ大義ヲ
犯シテ、顧ミザル者アルニ至ル、嗚呼此輩ヲシテ、故議官松岡卿
ノ事ヲ見セシノバ、爰ゾ愧ザルナキコト得ンヤ、「蓋シ卿、藩府ニ
在レバ乃チ、藩府ノ職ニ稱ヒ、朝廷ニ在レバ乃チ朝廷ノ職ニ稱
フ、小官ニ居テ鄙シテセズ、大官ニ居テ驚カズ、數々擢デラレテ
喜バズ、中興ノ治ヲ贊クルコト、十年ノ久シキヲ歴、教育ノ基礎ヲ立
テ、法制ノ紀綱ヲ張り、孳々トシテ倦マズ、老テ愈篤シ、遂ニ以テ、
元老院議官ノ位ニ終ル、一節始終六十四年、蓋シ一日ノ如シ、其
生ヤ榮ヘ、其死ヤ哀シム、君恩ノ隆ナルニ由ルト雖モ、抑モ亦臣
節ノ嘉ミス可キナリ、嗚呼卿夫知ルコアラハ、亦以テ瞑ス可カナ、

●〔日用文例〕

日用文ハ、文字平易ニシテ、長ガ、ラス意味明白ニシテ、深切ナ

ルヲ要ス、

○新年啓

新春之佳儀千里同風日出度申納候先以益御多祥御迎春奉拜賀
候次ニ小生無事加年致候午憚御心易ク思召可被下候書餘期永
日謹言

○復書

改年之御祝章忝拜披如命御慶不可有際限候
御満家被爲揃御安泰御越年之條大賀不斜候弊宅一同瓦全加壽
仕候午慮外御放心被下度候時令春寒折角御加養祈上候勿々
頓首

〔類語〕

〔頭〕年甫 改曆 履端 御慶 吉祥 慶賀 無涯 不可有休
期 日出度 申納候 祝ヒ入候 爲新年ノ御賀 履新ノ御祝狀

忝拜見 難有捧讀 〔腹〕益御機嫌克 愈御清適 被成御重歲
被遊御迎陽 奉恐賀候 拜壽不斜候 次ニ小家 隨而茅屋
無異條 碌々加算 加馬齡候 乍憚 乍慮外 御安意 御
放神可被下候 〔尾〕先者御祝辭申上度 尙參ニ可陳賀詞
頓首 草布 不宣

○暑中見舞之文

一書拜啓時下甚暑之候御座候處先以高堂御揃御安逸可被爲爲
雀躍奉抃喜候里母那陸ニ瓶乍輕非呈左右御笑味被下候得者
本懷奉存候時氣隨分御自玉奉祈候不備

○復書

芳墨捧讀如諭酷暑難耐候處筆研御清穆被成御動止候條珍賀
無量ニ奉存候野生ヨリ御伺候可申心組ノ處却而辱尊問且佳品
御惠贈被下感謝仕候尙近日趨庭可奉謝候倉卒不罄

〔類語〕

〔頭〕謹啓上 尺素拜呈 貴墨拜閱 朶雲薰誦 如高示嚴暑
 如命 炎天赫々 堪兼 難凌 〔腹〕華堂 高館 御堅勝 御
 佳廻 奉大賀 不勝忻愉 小生頑健 寒舍 平安 御省念
 御休意俗事紛紛 公私繁忙 御契潤 御無音 偏御海容 幸
 御仁恕 〔尾〕書外縷々付面叙 萬拜晤縷陳 走毫 不具 艸々
 不盡

○寒中見舞之文

片楮啓達仕候時分柄寒威激烈之候 尊體滋御清福御渡光之條欣
 慰々々奉賀候小家一同不相變健全罷リ暮シ候間乍意外御懸念
 被下間敷候 鷄卵一籃乍菲薄 晋呈仕候御叱存被下候得者本懷
 御坐候餘在面叙再拜

○復書

拜閱如命風雪破膚寒威徹骨之候御坐候處先以高門愈御安裕被
 成御凌恐悅不過之候僕平安消景罷在候幸ニ御煩慮被下間敷
 候殊ニ何寄之恩賜難有感佩仕候報酬之儀無之候得共冰糖任到
 來付高价御笑留被下度餘讓面謝敬復

〔類語〕

〔頭〕寒氣凜然 沍二尾捧呈 笑味 莞存 本意 適望 〔尾〕拜
 芝縷陳 自玉 愛養 敬白 肅布 九拜

○賀新婚之文

燕續啓達又手承リ候得者賢息某様此程首尾能御婚媾被爲一整候
 由御全家御懼躍奉察候依之不恥織微白鶴一縷棘鬣魚兩折走
 小价表慶賀之鄙意候尙不日拜參之上賀詞可申盡艸々不宣

○復書

瑤簡辱肅閱豚兒頃者任媒灼之意婚儀取結候處不斗辱懇問殊

蒙之恩腆不堪汗背候午禪各位ニ厚ク御禮被仰上度萬條
踵門稟陳可仕倉忙中拜酬如此候肅白

〔類語〕

近頃佳日被成御選下 昨夜既御婚姻被爲齊候段 被爲擇
吉辰御配偶之儀式御執行之由 幾久敷奉祝壽候 舉家之御満
悦奉想像候 叩門速賀詞可申上筈 不取敢趨庭祝辭可奉陳
之處 公私事務紛忙 執掌多事乍不本意 乍零義 因之薄儀
之至候得共 乍誑賤之至 借老魚一籃 黑縵子帶地ニ反 御
祝之印迄 備芳覽候 獻呈仕候 御笑擲被下候得者 御叱存
於被下者 本懷奉存候 暢揚之至御座候 何兩三日中登邸可
奉賀候 稽首不具 倉卒拜答

賀出產之文

御愛蘭今曉御平産殊御男子御誕生之由御雙親御始之喜悅無カシ

何許奉慶壽候御兩所共御安全之趣ニ候得共尙御愛護奉專祈候
紅綸子壹匹聊表賀意候御莞納被下度余讓面祝拜白

○復書

荆妻分娩ニ付被懸尊意過分之恩戴ニ預リ御懇情不淺感謝仕候
幸母兒共靖健能在候間乍恐御降心可被下候來何日參神之粗宴
相催候間御令嬢御召連御枉車奉待候草卒布復

○時候見舞之文

逐日酷暑相向候折柄闔門御動靜如何哉惡疫蔓延之趣新紙上往
々發見致候無御怠慢御預防祈上候珈琲糖壹罐晉呈御莞收被下
度候

○復書

爲時令尋問忝彩雲特佳品御投與被下御深情奉鳴謝候如諭拉
病追々流行致候由御同様保攝專要御座候尙登館萬可奉謝候

〔文材〕

時季向寒之候御座候處辰下兎角不順御障不被爲在哉折
角御加養奉禱念候 鷄卵一箱致進上候 鱸魚壹尾備聖覽
候

○請招文

隙者庭前之梅花滿開殊天氣晴朗ニ付親友兩三輩相會シ草齋相催
候足下御閑暇候得者日晡后ヨリ御咄旁御光臨奉待候

○復書

華墨敬誦芳園之魁花相綻候ニ付陪筵被仰下然ニ折惡敷無據緊
用有之乍遺憾拜趨仕兼候何不日面謝可仕候

〔文材〕

益裁之櫻花半開綻致候ニ付 弊廬ニ於テ小酌仕候 御寸暇候得
者御來駕被降度 御臨筵被下詩畫ヲ弄シ候得者 一段之興相

添可申存候 自黄昏御枉車被下度候

○報商况之文

過日來英米商船續々入港碇泊之趣橫濱ヨリ電報ヲ以申來依之
愚考致候得者必定舶來品下落可致存候就テハ兼テノ御賣拂可
相成物品者直御賣却決而御買込無之方可然ト存候先者右御報
知申上候

○復書

玉章飛來懇教之旨忝薰誦過日來價值之高下殊不定彼是苦慮脚
蹶罷在候折柄動者時機相失候難計候處頼手教大心中確據出來
致申候尙其他物貨景况上相伺度件有之候間后刻是非趨庭可仕
候

〔文材〕

生系 洋銀 貨物 相場 非常 遽然 騰貴 沸騰 見合 蹶

踏 入札 迅速 賣込 賣却 買入 豫定 勘定 賣離 成行
 見込 配布 運搬 遞送 好機會 好時機 損耗 報導 駛報
 電報 即答 急便 態人

〔異名類〕

〔正月〕王春 上春 芳春 規春 端月 孟陬 春規 鼎始 木
 德初回 元正開祚 玉曆回春 四序更端 三陽用事 〔元日〕三
 始 青且 鷄旦 正朝 〔二月〕如月 殷春 中陽 四陽 令月
 夾鍾 中和 韶華已半 〔三月〕春抄 五陽 禊月 殿春 蠶月
 竹秋 姑洗 春闌 鶯時 〔四月〕正陽 六陽 朱明 中呂
 〔五月〕泉月 鶉月 蕤賓 九夏 平分 〔六月〕庚伏 亢陽 鶉
 火林鐘 大暑流金 〔七月〕蘭月 相月 上秋 開秋 素商
 爽節 〔八月〕清秋 仲商 桂月 正秋 雁來月 中秋 〔九月〕
 貫月 涼秋 玄月 季商 杪秋 無射 授衣 秋容婉晚 〔十月〕

良月 陽月 應鐘 方冬 吉月 泰正 〔十一月〕復月 暢月
 黃鐘 芸生 朔易 冬至 〔十二月〕杪冬 薦月 餘月 朔年
 窮陰 太呂
 〔稱人居〕廣廈 文館 宏門 華第 玉宇 高閣 〔稱自居〕蝸舍
 弊廬 柴門 茅庵 〔他鄉里〕阿里 仙邑 仙府 錦里 〔自鄉里〕
 賤里 寒鄉 弊邑 下里 〔師〕夫子 先生 大教鐸 〔朋友〕淡
 交 膠漆 賢契 盟兄 仁契 金蘭 忘年友 刎頸友 〔父〕廼
 公 令尊 令椿 令府文 〔以上人〕 家父 家君 家嚴 家翁 以上
 父 先君子 先考 亡父 〔母〕北堂 萱堂 廼堂 〔以上人〕 孺人 家
 慈 慈母 以上 〔兄〕令伯 元芳 令兄 以上 長公 家兄 阿
 兄 以上 〔弟〕令仲 貴介 令弟 次公 淑弟 以上 阿叔
 家弟 阿仲 弟 以上 〔妻〕令政 令室 愛閨 以上 令寵 令可 以上
 荆妻 山妻 野婦 側室 以上 小妾 以上 〔子〕季子 賢息 愛息

異名類之部

令嗣シ蘭玉ラン 國器コクキ 肖令セツ以上他ノ
 子チ閨秀ケイ 令娘レイ 令愛レイ 閨愛 愛玉以上人ノ 豚兒トシ 豚犬トシ 豚兒トシ 劣息レツ以上
 云云 令姒レイ 令器以上人ノ 嫁嫁云

〔口上書類〕

○友ヲ誘フ文

明日ハ開校式ニ付御同道如何伺上候

○物ヲ贈ル文

葡萄一ト籃到來ニ任セ進上致シ候

○人ヲ招ク文

御同酌申度御閑暇ニ候へハ午後御入來待上候

○問ヒ合セ文

昨日ノ反物直段何程ニ候哉御尋申候

○轉宅報知之文

此度都合ツ之アリ何町番地へ住替致シ候間一寸御知ラセ申上候

○不參斷リ文

今日ハ腹痛イタシ參上出來申サズ御斷申上候

○禮ノ文

昨日ハ御馳走有リ難ク厚ク御禮申上候

○同

頂戴ノ鮮早速拜味忝存シ候何レ御目ニ懸リ御禮申上ベシ候

○安産祝之文

今日ハ御平産ノ由此品粗末ナガラ御目ニ懸ケ候

○着ヲ知ス文

御送リノ荷物今日儘ニ着イタシ候

○頼留守文

私事明日ヨリ播州へ參リ候間留守中諸事御心添へ願上候何レ甘

日頃ニハ歸宅拜眉ノ上御禮申候

○船問合文

私四五日中東上致度何日何丸出船致候哉伺上候

○見舞之文

先日来御不快ノ由乍存今ニ御無音昨今如何折角御愛養祈上候

○悔状之文

尊大人兼テ御不例ノ處卒然御容體變ラセラレ御歸泉ノ趣驚愕舉家ノ御愁傷察上候

○近火見舞之文

昨夜ハ御近傍ヨリ失火ノ由嘸御狼狽ノト存候別段御怪我モナク御立退ギ成サレ候由大慶ニ存シ候

●西洋料理各種の製法

●鳥獸魚肉又ハ菜蔬を製理する物に其名種々あり左に貳三を記載す

●(ソーフ)は雞肉又は牛肉を煎したる者の液を云ふ(ライヌチツゲン)雞肉と飯にて製したる者を云ふ(ソールビーフ)は鹽漬けの牛肉を云ふ(シチウハイ)雞肉にて製したる者(ホイルドフヒツシユ)魚を湯にて煮たる者(ロウストビーフ)牛肉の蒸し焼者(コロツケ)雞肉又は牛肉と芋にて製す者(ハームエキス)鹽豕と雞卵あり(フライフヒツシユ)魚を牛の蠟にて揚たる者(チツケンロースト)雞肉の蒸焼者(ホーゲチャップ)豕を焼きたる者(ソーセイヌ)豕にて製する者を云ふ

●西洋料理持へ法

●豕の肉を煮る法先豕の油身を去り六分程に切り牛酪と刻み葱と共に鍋に入れて火にかけ其葱の薄鳶色にあるを待て焼肉に

用ゐる汁温飴粉芥子胡椒鹽酢なば交せ合せ緩々と煮る時は極上等に出来るあり

●藥汁を製する法先新しき牛肉の油を去り骨を取り細末にして同じ分量の水に入火にかけ凡う十五分間煎たる後其液を篩にて漉す者あり

●鮭の肉を煮法 先づ鮭の身を一寸五分斗りに切りて胡椒の粉を散り掛け洋紙に一面に牛酪を置き其の紙を鮭の切身の一片を其紙の上に載紙の四隅を鳥度と捻り強き火にて十五分斗りあぶるあり

●隠元豆の煮法 豆の莢の筋を去りて細く切鹽水に漬け而して別に鹽水サヤを鍋に入煮立豆を入れて急に煮るべし(但ふたをせざると)

●魚を焼く法 何魚に限らず水にて能く洗ひ布拭フキンにて水氣の拭

取焼鍋に牛酪又は豕の油を入れ煮たせ是に其魚を入れ炙上げば篩の上に置きて油をしらむべし

日本料理之法

●小豆を早く煮法 第一小豆の中へ竹の皮を一寸斗りに切りたる者を三つ入れて煮るあり

●章魚の照焼の法 湯煮たる章魚の足を薄く切て水氣を布巾にて布き取り串を刺て山椒醬油をつけて焼くあり

●烏賊の田樂の製法 先水にて洗い足を取り豎に三つに切り表より横に切目を細く入れ串を刺て醬油を注て焼き味噌を付けてやくべし

●大根を和かに煮る法 先づ湯に煮て煮上るを待て少々鹽を入れて直に火を引くべし必らず和に煮る妙あり

●雉子を焼の傳 よく羽を取り腸を取り腹の中を能洗ひ麵包粉

を澤山入れ牛酪胡椒の粉及び鹽をよく詰め其割きたる腸を縫ひ柔き火にて全身に火の通る迄焼かり凡そ四十五分位にて焼くを良好の者とす

●胡蘿蔔を煮法 先づ細に刻て鍋に入る汁種に食鹽と胡椒を交合して煮たる後牛酪と麵粉を加へて再び煮るあり

●比目魚の味噌煮 先づ水にて洗い三枚にをろし小形に切り而して鍋に味噌のすりたるを入生姜をゝろして其汁を絞りて入又酒にて味噌を溶し緩火にて煮詰め其中へ肉を入れて又煮る也

●银杏蒸の製へ法 新しき银杏を生にて皮を去り澁皮は熱湯に浸して引上げ是を細かに刻み摺鉢に入れ能く摺つゝし水を入れて溶して篩を以て漉槽は復すりて漉し器の上水を流し底に澱りたる物に葛粉を飯の湯にて容解したるを少し加へ極加減の宜敷だし汁を入れて適宜にのばし茶碗又は鉢へ魚鳥の肉或

は貝類麩木濕地茸などを混て盛れ银杏の溜り汁を注て常の茶碗蒸鉢むしを爲す様に蒸すあり

●染色法之部

○木綿金巾類を上等濃花色に染る法

(第一次 糊拔をさす) 舶來金巾おは糊の多きものかれは先づ之れを除くべし其法銅又は鐵釜に湯を沸かし木綿を入れる湯の分量に木綿を押し入れ十分餘りある程にさし煮ること三十分時間其間に棒にて度々上へ下へかへし取出して共に桶に入れ蓋をさし置くこと一夜にして之を絞り平かある石の上にて能く擣ちはたき清水おて洗ふ

(第二次 油氣を抜く) 凡て西洋日本に限らず木綿金巾には油氣あり之れを去らざれば色中に泌み込まぬかり故に之れを抜くには先づ釜に湯を沸し木綿一反に洗濯曹達十五匁の割に溶

し糊拔したる木綿を濕りたる儘藥と共に釜に入れ(湯の分量は前より少し多くすべし)煮ること一時間あれば其煮汁薄茶色とある其儘蓋をかき置くこと十二時間引上げて度々清水にて洗ふ若し反數多く一度に煮られさるときは湯と共に桶に入れ蓋をかき置くも可あり

(第三次 濁氣^{アツク}を抜き) 第二次に用ひたる洗濯曹達の藥汁は唯水に洗ふ耳にては容易に去らす若し之れを能く去らさるときは染具に妨げあり故に之れを去るには清水五百分と硫酸一分の調合水を造り此の藥水にて洗ひ其儘四五分時間浸し置けば濁氣は残らず脱出す又之を清水又は流水にて能く洗ひ絞る

(第四次 黄色血濁鹽に染む^{青酸加里}_{トモ云フ}) 木綿一反に付三匁の割を以て適宜(染めらるゝ程の分量)の湯にのばし錫液一匁を混し染め着け其儘置くこと凡一時間にして引上げ絞る其絞り汁は

貯へ置て後日の染汁に用ふべし

(錫液製法) 鹽酸二十目硝酸八十目を調合し丈夫ある石焼の瓶に入れ純粹の錫を撰ひ金槌にて薄く打延はし鉢にて小さく切斷し少し宛右の藥中に入るゝときは烈しく沸き上り瓶の外に溢れ出る故に徐かに少し宛溶かし溶け止は些少の清水を加ふべし然るときは又沸騰して錫を溶すこと反て前より早し此とき又少し宛錫を入れ溶け止まは又少しの水を加へ斯く如くする度々に及び最早溶けさるに至り其溶液を壺に入れ貯ふ右分量の藥にて凡そ四十貫餘の錫は溶るものなり若し製造を煩はしと思はゞ賣品に結晶錫と云ふものあり買得て用ふべし

(第五 鹽酸鉄に染む) 一反に三匁の割にて適宜の湯にのばし染着て其儘置こと三時間絞りて空氣に觸れしめ水にて洗ひ乾

すへし此れにて薄青色とある其絞り汁は別器に入れ青き粉
(ベレンス)を沈澱せしめ上は澄みと捨て乾し貯ふ

右第四第五次の代りに「ベレンス」にて一度に染上る法は
「ベレンス」は水又は湯にては容易に溶解し難きものあり故
に「ベレンス」一匁に稀酸二分許りを入れ水を注ぎ鉢の中に
て摺りませるときは直ちに溶解するものあり扱て木綿一反
にて付「ベレンス」三匁の割に溶し錫液一匁を混ぜ染上げ清
水あて軽く洗ひ乾すべし

(第六次 紫に染む) 一反に紫紛一匁二分の割あて適宜の湯に
のばし能く染着け絞る絞り汁は後日の用に供ふ

(第七次 「ログードエキス」に染む) 一反に付十二匁之を半分
に爲し先つ六匁を適宜の湯にのばし能く染め着て絞り乾す其絞
り汁は後の、ばし汁に用ふべし

(第八次 又「ログードエキス」に染む) 残り六匁を前の絞り汁に
のばし能くのばし染め着け絞り乾す

(第九次 里みを着る) 精製硫酸鐵四匁膽礬三匁を一所に溶し
染め着け絞りにて空氣に觸れしめ清水に洗ひ絞り乾す此にて全
く紺色とある

(第十次 糊を附る) 蒟蒻糊を用ふ其法四斗樽に水凡一斗を入
れ蒟蒻の粉凡一合程を混ぜ捧にて二時間モかき廻すときは粘
りを生す之を布にて漉し適宜の水にのばし木綿一反に付紺粉
一分五厘「クリスリン」一匁の割に入れ一反宛糊を爲し疊んで
能く撃ちはたき張手に掛け伸子を軽く張り乾す

(第十一次 光澤を出す) 板卷をなし掛失槌を以て平かある石
の上にて強く撃つと凡五分時間一應清水に通し又張手に掛け
乾し再び板卷して槌打を爲し能く光澤を出す

光澤を出すに「ロール」として二本の鐵棒の間を巻き通すときは至極便利あれども金巾には耳の厚き所あれば用ひ難し日本木綿其他厚薄なき織物に用ひて可あり

右染法は羽二重金巾とて専ら衣服の裏地に用ふ此法を用ひ日本木綿及び麻等に染るときは上紺とあるべし

○全千艸色に染る法

(第一次 糊扱) (第二次 油氣と抜く) (第三次 滷氣を抜く) 皆前法に同じ

(第四次 鹽酸鐵に染む) 金巾一反に付四匁の割にて適宜の湯に溶し能く染め着其儘に浸し置くを凡二時間にして取上げ絞りにて空氣に觸れしめ軽く水にて洗ひ乾す其絞り汁は貯へ置くべし

(第五次 黄色血滷鹽に染む) 同しく一反に六匁宛にて割合よ

り少し多き湯に溶し錫液一匁を加へ能く染着け染汁と共に釜に入れ漸々に寒暖計百五十度迄に温め湯の餘り冷ぬ様にちし其儘浸し置くと一夜にして取出し絞り乾す此時薄き青色とあるべし

(第六次 并ひ鹽酸鐵に染む) 右第五次の餘り汁に適宜の湯を加へ又新に鹽酸鐵二匁を入れ前の如く染め其儘置くと凡六時間色の好くあるを同ひ引上げて絞り空氣中に振り廻はし水にて洗ひ乾す

右第五第六次の餘り汁は別に貯へ置き後日の染汁に加ふへし又底に沈みたる青き泥の如きものは上は汁を除き紙にて漉し乾して貯ふ此物は粗製の「ベレンス」あれば之を色糊に用ひ又分拆して血滷鹽を取るべし

(第七次 色糊を着る) 糊は生麩或は温飴粉馬鈴薯の澱粉「ア

ラビヤゴム」杯其時々價の安きものを撰ひ用ひ之と糊に造り「ベレンス」を溙酸に溶したるものとす紫粉とを少し許り加へ青赤き糊となし一反宛桶の中にて疊みあから着け其儘絞りて石の上にて撃ちはたき張手に掛け軽く伸ねを張り乾すべし又乾きたる上は板卷を爲し槌打して少しく光澤を出す

若し「ベレンス」にて一回に染めんどあらは糊拔をあしたるものを赤楊莢又は山藤杯の薄き煮汁にて染め之を弱き鉄漿又は硫酸鉄にて黒め鼠色とあし上等金「ベル」五匁を溙酸にて能く溶したるものに錫液廿滴を加へ染着け乾して色糊を爲す等は前法の如し

○生糸鍊る法

生糸の鍊るには糸百二十匁に付石鹼三十匁を水に溶し用ふ此の液の分量定まりあしと雖も糸を侵して餘裕あらんとを要す先づ

鍋に水を入れ細かに剉したる石鹼を之れに入れ暫く沸騰して丁寧に之を攪拌し全く溶けたるとき線糸の中に棒を通し此棒を鍋の真中に架け糸を之に並へ懸け其下部を鍋の中に垂し或は上部を下に轉し或は横部を上廻はし熱湯にて煮るときは其護謨質自然と溶け糸の體容を減し光澤を表すべし此とき糸と取り出し棒の兩端を高く釣上げ之を冷す程よく開き列ねて一線毎に其下端に麻の糸を通して之を縮ね置き別に長四尺幅三尺の布袋と造り前の線糸二貫四百目を之れに入れ其口を封し又新に鍋に水を入れ前の半量の石鹼を溶し此の布袋に入れて煮ると約そ一時間あるべし其煮沸する中は棒にて程よく袋を抑へ水面に浮ひ或は鍋底に沈むとあからしむ然る後布袋を揚げ之を冷やし糸を出し棒に打懸け次に三個の桶に水を盛り其線糸を洗ふに初めは甲の桶にて洗ひ粗々石鹼を流し出し次に乙の桶にて洗ひ其次に丙の桶

にて洗ひ石鹼を去り盡し更に他器に硫酸を注ぎ入れ其中に水を盛り(水二百目に硫酸一匁を加ふ)之を煮沸し右の糸を浸すとを五分時間にして取出し水にて能く洗ひ酸氣を去る

(又法)練らんと欲する生糸白色ある時は直ちに細綴ある布袋に入れ強き石鹼の溶液中に煮ると二三時間にして護謨の十分に溶去るを窺ひ之を取出し水にて能く洗ふ○黄色を帯ひたる生糸は初め竿に懸け石鹼の溶液中に浸し之を浸すと約そ一時間の後ち之を出し水にて洗ひ再ひ竿に懸け乾す

○絹布を鍊る法

長八尺乃至十尺に付良好ある石鹼十五匁糖百二十匁乃至百八十匁を適宜の水(即ち絹の十分浸る程)に交せ以て絹を煮るべし約そ一時間を過ぎて之を出し華氏百二十度の温湯にて洗ひ更に冷水にて十分に洗ふべし

○絹布を晒す法

硝酸一分と鹽化水素酸四分を合せ之れに水を加へ華氏三十度乃至三十五度にてポーマー氏驗液器の十五度乃至十八度の強さあるとき別に水十倍に溶したる石鹼液を製し之を温めて晒らんと欲する絹を浸し次に右の酸液を加へ浸し置くと二三時間にして稍暗色を帯ひし時出し直ちに冷水にて十分に洗ひ亞硫酸瓦斯を以て晒す(硫黄を火に燃したる薰煙なり)總て絹を練るに用ふる水は石灰を含ませるものを用ふべし石灰を含むときは絹の外表を包みたる護謨と化合して石鹼を造成す此の石鹼は甚たしく其質を害するものあり

○絹布を深黒色に染むる法

硫酸鐵百二十五匁適宜の水に溶し之れに硝酸鐵十五匁を加へ此中に絹を浸すと約そ一時間にして絞り能く水にて洗ひ更に六百

匁の「ロツジード」と百二十匁の「フスチック」を適宜の水に煎し出し此中に一時間浸し染むるの後十五匁の硫酸鉄を加へて再び浸し染ると十分時間にして絞り水にて洗ひ乾かす若し此にて十分に深黒色とあらざるときは硫酸鉄を加ふる前に少許の「ロツジード」の煎汁を加ふべし

○山蠶製糸法

左に記する藥水三合に山繭百個の割にて投し之を混攪すると二三回にして凡五分時間浸置き(繭の糸口を去り一條の糸口出るを適度とす)糸口盡く出るに至らば繭を箆に移して冷水に投し其水一升到藥水凡一合許を注加し次に之を繰るの法は常に異なるとあく了て簞のまゝ凡一時間許冷水に浸し後米泔汁を以て晒すときは忽ち美なる光澤を生す若し藥氣十分去らざるときは上より熱湯を注ぐべし但此法家蠶糸を製するにも適用するのみあり

らす糸力の強き光澤の多き尋常湯にて繰製したる品の比に非ず(藥水製法)製法清水一升到最上の生石灰一升を混し之を煮ると凡一時間にして濾し澄ましめ又清水三升到上好の木灰三升を投し前の如くし次に樟腦十五匁を充分清水に溶解し前の二液と和合するあり

●毛織物黒羅紗外套色上ケ法

(第一次洗濯をす)外套一枚に付凡そ三四匁の結晶曹達か又は石鹼汁或は灰の滷を湯にのばし鹽にて能く踏みあらひ後清水にてそゞき乾すべし若し少しにて毛垢の残りたる所あれば其所は藥の染め着かぬものあれば洗濯は如何にも丁寧に爲すへし尤も石鹼は澤山入れても曹達灰の滷などは多く入るべからず毛の質を損する恐れあり

(第二次「ロツジードエキス」に染む)差渡し二尺以上の鐵釜に水を

七分目計り入れ手の入れられぬ位迄温め兼て溶し置きたる「ロ
 シードエキス」と其二十分の一の曹達とを入れ(通例外套一枚に
 付十五匁位)能くかき廻し外套を入れむらのあき様棒又は竹に
 て断へす上げ下げをすること凡そ十分時間にして其儘釜の中に
 置くこと又二時間引上げて水氣を滴らし清水に投し洗ひ乾す
 (第三次硫酸鐵に染む)前の鐵釜にて同し分量の湯を沸かし溶か
 したる精製硫酸鐵に入れ(凡一枚に付七八匁位)能くかき廻し染
 品を入れ棒にて上げ下げすると凡そ五分時間にして其儘釜に置
 くと又一時間取出し擴けて竿に打掛け暫く空氣に觸れしめ後ち
 水洗して乾す

右にて色合充分に上らざるときは重「コロム酸加里五六匁を
 用ひ前の仕方にあらひ染むへし又故と紺色ありし品を黒色に染
 直さんと思ふ時は第二次第三次とも其藥の分量を増すべし尙ほ
 色合直らざるときは前の手續きを繰返し好き色になる迄染むべ
 し

(第四次仕上げ方)右染上りたる品充分に乾きたらば之れを廣き
 板の上に擴け薄き燒酎を一體に吹き掛けて羅紗刷毛を用て毛並に
 従ひ丁寧にはきたる後洗濯屋の用ふる西洋火尉斗を掛け光澤を
 出すべし

右の外紺色の色上げは金巾紺染法に従ひ始めに紫色に染め第二
 次に「ロシートエキス」に三次に硫酸鉄と其分量を加減して染め
 るもよし又手數を除かんと欲せば紺粉一品にて染むへし其時は
 通例の外套一枚に付五六匁斗りの紺粉を溶し硫酸少許を加へ大
 釜の中にて染むへし又茶色あるときは茶粉一品にてよし

萌黄色「フランクット」色上法

(第一次洗濯を爲す)前條第一次の手續きに従ひ半部一枚に付

(惣て毛布は二枚續きたるものを本部と云ひ半分に斷ちたるものを半部と云ふ)二三匁の洗濯曹達石鹼汁或は灰の滷等を用ひ能く洗ひ乾す

(第二次色上げをさす)前條に同しき鉄の大釜に湯を沸かし半部一枚に付紺粉(下等を用ひて可あり)四匁黃粉(ピクリン酸と云ふ)五匁五分の割にて別に溶したる上之を混ぜ合せ地合よき羽二重絹にて漉し硫酸鐵二匁と共に釜に入れ能くかき廻し一枚宛ひらき様そむへし本部あれば二枚分を一度に染むものあれば其扱ひ方尤も注意すへす色合と充分に染るを見て引上げ水氣を滴らし清水にて洗ひ日蔭に乾す

湯の温度を強くすれば染附易し弱ければ手間の掛れともむらの付くと少きし又藥の分量も其品物に依て加減すへきのみならず深青色の濃さを欲せば紺粉の分量を増し黄色勝ちを好まば黃粉

を多くし紺粉を減すへし又薄鼠色の毛布を萌黃に染直さんどあらは藥の分量を多くすべし又青色の毛布を萌黃に染直すときは始め黃粉のみにて染め其色合を見て再び萌黃にて染むべし(第三次仕上げ方)右染上り乾きたる後先つ兩縁を縫ふべし其縫ひ方は色々あれども筆に盡し難し仕上方は惣て前條に同し

○赤色「フランクェット」の色揚法

(第一次色の呼出し)赤「ケット」は別に洗濯をさす先つ鹽に沸湯を充分に入れ硝酸を注ぎ入る其分量は凡硝酸一杯に沸湯五百杯の割合に爲し毛布を入れ蓋ををし置くと凡一夜にして引上げ水にて洗ひ日陰に乾す斯くさすときは泌めも垢も一度に脱ち其色合も餘程奇麗になる故に餘り色の變らざる毛布あれば此法のみにて充分の色上とあるへし若し此法を用ひても色の上らざるときか又は泌みなどの残りあるときは次の染法を用ふべし此と

きには乾すには及はず

(第一次赤色に染む)大釜に湯を沸かし(温度は前に同じ)半部一枚に付「サフラニール」三匁鬱金粉九匁枸橼酸(若きときはは檸檬酸)五六分の割合にて之を一度に入れ捧にて能く搔き廻し毛布を入れ前條の如く染め着くべし尤も此藥の色の有丈けは染み着くものあれば其色合を見て取出し水洗して日蔭に乾す其残りたる汁は必ず貯へ置て後日赤色染桃色朱鷺色トキとに用ふへし此藥は木綿麻杯には着かす毛絹にのみ用ふ
赤色を染るときは鐵釜を用ふへからず銅又は唐金土燒又桶杯を用ふ鐵鍋にて染むるときは染色黒みを着る故必ず謹むべし

(第三次仕上方)都て前條に同じ

○羅紗又は毛織敷物類を洗濯する法

先づ洗濯せんと欲する品物を數次撲て其塵垢を去り然して清淨

なる板の上に敷き四方に針を打て張り詰め次に清水を盛りたる桶二個を用意し一桶には牛膽水(牛膽水製方は牛膽五合五夕に明礬の細末十六匁を加へ凡一時煮て之に鹽百目許りを混し攪和して靜定し滓を去り壘に移し固封して貯ふ)を注加し此水少許を刷毛に含ませ之れを以て毛織の面を能く擦れば無數の細泡を成すへし如斯すると三四次の後一桶の清水を布に含ませ更に屢次之を擦り其細泡を去り能く洗ひ清め而して後之を速かに乾かせは其色幾ど新物と異ならず

○白布の汚點を落す法

能く熟したる蕃茄アケナスを切り其切口にて白布の墨汁其他の汚點を擦すれば忽ち清白とある又手の不潔を洗ひ落すにも妙なり

○油畫の汚れを洗ふ法

油畫を枠の儘柔かある度か海綿を水に浸して其外面を洗ひ然る

後絹製の手巾を以て其濡ひの乾くまで拭ふべし去りながら其畫甚しく垢附居れば粹より取り外し清潔なる手拭に水を充分含ませ畫の面に蓋ひ掛時々之を雨水か又蒸溜水を洒き掛け二三日も其儘置き次に手拭を取り除き清潔なる海綿に水を含せ畫を拭ひ再び新しき手拭を以前の如くおし又取り又掛け畫の汚物悉く手拭に吸取らるゝ迄取り換へを爲すべし○右終れば極柔き海綿を以て能く畫と洗ひ之を乾し後亞麻仁油か胡桃油を小布片に浸し畫面を磨擦すべし

○黑色インキノ製造法

水千分を以て没食子百二十分を煎出し綠礬二十分「アラビアゴム」三十分砂糖二十分を加ふ此の如く砂糖を入れて製したるものは「インキ」の乾涸するに至るや能く其粘力を保たしむべく乃ち又騰寫「インキ」とあすべし

○赤色「インキ」の製造法

粉末せる洋紅虫十二分を炭酸「アムモニア」或は「ホツター」四分を沸騰水三十二分に溶せしものを以て浸出し而して其浸出せる上清液を傾瀉し貯ふ

○青色「インキ」の製造法

「ラッコモス」四匁酒石鹽五分清水十六匁を淨潔なる壺に入れ温所に溶解せしめ此浸液の上清を傾け取て「アラビアゴム」一匁を加ふかり
又法淀青四匁「アラビアゴム」八匁を適宜の水に溶解し細末せる酒石二匁に細搗せる白糖二匁を加ふれば亦鮮美青色とあるあり

○綠色「インキ」の製造法

銅綠四匁を醋八十匁に溶し温所に置くと二三日にして細末の明

礬二匁を加へ善く攪和すべし

○人造す象牙製造法

卵殻を搗て能く粉末とちし之れに魚膠と「ブランデー」を和し糊稠とちし之に欲する所の色を着け楮型に油を塗り此内に前の糊を注入れ乾燥する迄静定し置くべし乾て後型より出せば外見頗る象牙に類似する者あり

○象牙の染色法

(青色に染む)象牙を硫酸「インダゴ」に「ポッター」を和したる稀溶液中に投入する暫時ちれを青色とある○又法硫酸銅の強液に浸すもよし

(黒色に染む)「ロッシュウード」の煎汁中に煮ると數時の後赤色硫酸鐵或は赤色醋酸鐵溶液中に浸せは更に美黒色とある○又法黒色「インキ」中に投するもよし

(綠色の染法)綠青を酸に溶かし此中に黒色にちる迄浸すへし

(黄色に染む)中性「コローム」酸「ポットアス」の強溶液中に十八時乃至廿四時間浸し置き次に醋酸鉛の溶液を煮沸したる中に暫時間投入して取出せば其黄色最も美麗なり

(赤色に染む)暫時硝酸に浸して之れを能く水にて洗ひ次に「フクシン」(唐紅粉)の酒精溶液中に浸すべし然るときは其色忽ち染て脱するとちし

○靴を軟かにする法

「チロシン」(石炭より取りたる油即流動水化炭素)を水に濡して硬くちりたる靴に塗りて能く磨り込むときは之を軟かにちすと最も奇妙あり

○靴墨製造法

象牙炭十一匁糖蜜十一匁鯨油二匁八分硫酸二匁八分上醋一合五

夕先の炭蜜醋の三品を混合して別に鯨油と硫酸を和し而して之を已に混和したるものに合すべし然るときは最上の靴墨を得べし

○氷製造法

此製造法は先桶の中に水を盛り此桶中に更に水を入れたる小桶を挿入して其外部ある桶へ結晶硝酸諸母尼亞を投すれば小桶の水は暫時にして氷とある

○生姜酒製法

一名ジンジ
ヨルヒア

生姜十二「オンス」を擦して細くかし水九「カルロン」の中に入れて一時間煮て其液を漉し之れに酒石酸三「オンス」白砂糖八「ポント」を加へ再び煮て後「アラビアゴム」八「オンス」を水に溶かしたる液と「レモン」油二「ドラクム」を加へ華氏百度に冷し而して之れに新鮮なる酒母少許を加へ醱酵せしめ壺に貯ふ此水頗る風

味善く精神を爽かにかし清涼の功あり

○甘薯を以て飴を製する法

蕃薯を蒸して之を舂き瓶又は桶に移し麥芽ホヤシを加へ凡薯一貫目ニ付四斗ヲ混入ス暫時蓋を覆ひ置き後三四日混動するときは恰も水を添へたるもの、如く變化す此の時袋に入れて絞り垂れ汁を鍋にて煉り詰め成るへく長く大に掛くるを好しとす

○座敷花火の製法

(櫻) 硝石十匁硫黃二匁二分木炭二匁五分鐵屑九匁五分を調合し紙撚イトス、キに撚り用ふ

(系薄) 硝石十匁硫黃壹匁五分木炭四匁鐵屑三匁を調和し製方前イトス、ダレと同じ

(系簾) 硝石十匁硫黃二匁木炭九匁樟腦一匁五分を徑木の筒に詰め用ふ

○パン製法

大麥の粉に水滴宜を加へ之れに又蒸餅母少許を入れて攪拌し捏て餅の如く爲し鐵箱に入れ上下に火を置き炮り熟して之を放冷し貯へ食用とあすあり通常のもは大麥を用ふれども上等品は小麥粉にて製るあり

蒸餅母は小麥の粉に水を加へ捏ねて泥とあし臺に入れ蓋を堅くあし煖所に置くときは自ら泡醸して酸味を生す此即ち蒸餅母あり

又麥酒葡萄酒等を醸造するときは生する所の酵を用ひて製するも可あり

○人造寶石の製造法

純粹水晶或は燧石を研末として其八「オンス」に炭酸「ポットアス」二十四「オンス」を配合して之を焼了し已に冷あるに及ひ之

に熱湯を盈てたる盃子に注入し以て其沸滓の定息する迄稀硝酸を入れて攪拌し更に水を以て極めて洗滌し其水の無味とあるに至て之を乾燥せしむると一日精製白鉛(即炭酸鉛)十二「オンス」を加へて研末とあし又留水少量を以て洗滌し又其乾燥するを待ちて配合量凡る十二「オンス」に硼砂燒灰一「オンス」を加へ磁器製の臼中に在て極めて搗碎混和し而して之を清淨ある坩堝ヒツボに移し以て溶解して其液を冷水に注入す已にして之を出せば即ち玻璃狀を帶るを見る是に於て又之を乾燥せしめ而して又之を溶解す溶解する毎に冷水に注入すると初の如くし且つ新に坩堝を換ふ此くの如くすると二三回以て其一成分たる白鉛の還元するに注意すべし溶解既に了れば研末とあして硝石五「ダラッマ」を加へ其全量を舉て溶解を経ると更に一回あれば便ち坩堝内に燦然たる光澤を發する結晶塊を見るべし是れ乃ち人工寶石を製するの

配合物たり

質料已に成るの後酸化金属を加へて一種の色を生せしむべし其加色の妙を得て其量宜しきを得るときは宛然たる天然寶石に異なることあり

○白色石鹼製造法

好良なる白色石鹼を製するには牛脂八分或は九分に橄欖油の一分を和し苛性曹達の溶液を混して釜に煮熟して石鹼に變せしむ而して其石鹼を釜より取出し木匡に移し或る香料を加ふ

尋常の白色石鹼は凝乳石鹼香氣及び「カラウエー」油に佛手柑油「ラベントル」油「オリガナム」油の少量を加へて製したる流動石鹼にして尙ほ其香氣を善くせんと思はゞ又更に肉桂油巴且油杏油麝香龍腦香等を加ふるを要す此等の香油は石鹼の一「ポントレット、ウエー」に(十三貫六百目)あり「ポント」より二

「ポント」迄の割合を以てすべし

○櫻花の漬法

櫻の花漬は先淨水一舛に食鹽二合の割合を投し能く沸湯せしめて放冷し(沸湯の際攪拌するも往々焼付の憂あり故に沸湯へ生鹽を投し攪拌して直ちに放冷するを可とす)之れを櫻花(櫻花を摘採するの好機は開綻將に八分からんとするとき花の軸より摘採す)一舛(俗に謂ふ山盛りにて)を浸し浮蓋を覆ひ一週間或は五六日を経て鹽水を換へ更に新製(前の如く鹽水を製す)の鹽水に浸し五七日を経て櫻花を噛み試むるに苦味あければ止む若し苦味あれば幾回も前條の如く行ひ全く苦味を脱却せしめ別に細末の燒鹽一合に梅醋五才(即ち燒鹽の二十分の一)を和し能く攪拌し之に前の櫻花(鹽水を絞りたるもの)を混和し直ちに硝子罎或は壺の如きものに容れ壓着して(重しを用ふるに及はず)貯ふ

○芥子漬の製法

先つ小さき茄子を鹽漬とし二日は置き後水氣を布巾にて拭きとり芥子を水にて堅く煉り布につゝみて沸湯の中に入れ其後取上げ十分さまし然る後醬油にて煉合し芥子一升に麴七合余を加へ能く交合せしめ右の茄子を壺に一順あらへ芥子を置き又茄子をあらへ芥子を置き如此幾度にも漬けて蓋をかし風の入らぬ様充分目張を宜くし貯へ置くべし

○濱納豆製造法

黑豆一升小麥粉六合を取り先つ黑豆を煮小麥の粉を交せ土室に入れ置きて麴とあし扱水六合に鹽三合を加へ充分煮たる後桶に入れ右の麴を能く碎き鹽水へ入れ生姜山椒の皮陳皮あどを細末とあしたる者を麴と一つに鹽汁の中へ入れ蓋をかし壓石を掛け置けば鹽汁上に浮を其儘にして二ヶ月半程して取出し鹽水を去

り紫草の葉を細末として交せ少し日に乾して貯ふるあり

○味噌の製法

六七月の頃大豆一升をいりて引割り皮を去り麴と細きとを分け大麥一升よく揚きて水に一夜も浸し右の麥とあらし豆とを一つに蒸し細末の豆の粉と交ぜ室に入れ麴とあし麴の花の付く一日前に茄子を切り一升ほど白爪を切りて又一升ほど鹽四合に合して桶に入れ重石を懸け置翌日上に出たる水を取り右の麴を浸し爪も茄子も一つに交せ桶に入れて蓋をかし壓石をかけ毎日一度かきませ十日余過ぎて胡椒及山椒穂蓼紫草あどを入れ蓋をかし重石を置き毎日かき交せ三ヶ月の後用ゆべし

○酢の作法

土用中好酢と酒とを等分に合壺に入れ堅く蓋をかし壺から日光に晒し三月を過ぎ用ゆべし又は其に菖蒲の葉を刻み入れ置け

ば匂ひ宜せし此れを菖蒲醋と言ふ

○卵切之法

卵を煮ぬき皮をむき酢に漬をき取出し花形に切り兩手にて押せば黄身出で種々任意の花形とあるあり

○鳥餅之製法

大鳥にてモ小鳥にてモ細かにたゝき醬油にて煎上餅を能く焼き薄きたれにて少し煮て右の鳥を椀の中の餅の上に掛るあり

○磨付木製法

柳又は松等の細き木片を硫黄の溶液に浸し「アンモニー」と「コロリデポツター」に樹膠を加へ木片の先に着けるあり此れを金剛砂及び砂紙上にて摩擦すれば忽ち燃るあり

○日用秘術之部

○油虫を去る法

カワラヨモギクキハ
青蒿の莖葉をかまどの間に入置く時は油虫住まざると妙あり

○庖刀類にさびの付かざる法

庖刀類を汚亦是鹽氣のある手にて用ひたる時は充分能く拭ひて椿の實の油を塗り置くべし必ずさびの付くとあし

○鏡のくもらざる法

鏡の曇りたる時は白粉のときたるを付つ絹切れにて拭へば明かにあると常の如く成る者あり平常如此かし置かば決してくもるとあし亦杉原紙奉書紙等にて拭ふも宣しすべて水又は油の懸りたる時は其儘拭ひさるべし其儘捨置時はさびくもる者あり

○顔の不潔あるを美にする法

顔の色黒く不潔ある者は蒼甘の葉の粉を飲むべし艶出美しくある者あり

○顔を輝美くする法

顔を輝よくするには白附子ハカクブシを酒にて煉りて付くれば顔の病癒へ輝よくある者あり

○髪のはゆる法

くちあわの衣キヌを求め之れを禿たる所にはるべし思ふ程の大きに切りて温飩の粉を水にて煉り右のくちあわの衣にのばしはり置けは奇妙に髪生る者あり

○燈火無くして夜中者を見る法

硝子の極上等にしてあわ等の無き者にて四角ある器を製り其内に水銀を入れ蓋あき方を額に付けて見るべし書物を讀位には十分に見ゆる者あり

○寒中手足を冷ぬ法

胡椒を二つに割り焙烙にて十分いり紙に氣のぬけぬ様つゝみて臍へしに當て置くべし冷へぬ者あり

○煙に巻かれざる法

大根を口に含む時は煙に咽せざる者あり

○炭火の飛ばぬ法

炭を少時水につけ置能く日に乾かして用ゆれば飛ばざる事妙也

○百日百夜寝らざるも氣力おとろへざる法

牡蠣の殻を細末として呑み置く時は氣力をとろへざると妙あり

○西瓜を水あくして冷す法

西瓜を所々撥破カキり日中に日に當て酷ありたる時日陰に取入れ能くさまして食ひあば其冷かあること氷の如しやつて御覽遊ばせ

○卵の善惡を見る良法

卵を取りて兩方のさきを舌に當て少時考ふべし良き卵あれば一方は暖く一方は冷かある者あり若兩方共冷かあれば悪しきと知るべし

○鹽魚鹽出しの法

鹽魚を水に浸し其内へ木槿の葉を入れ置くべし或一法は又藁に包みて一夜土中に埋め置く宜し

○惡水を清水にする法

惡水を清水とするには壺を置き其壺の下に炭を順に置き其上へしゆるの髪を二寸程にしき其上へ沙の細かくして土の無き所を一杯に入れ其沙の上へ水を入れ壺の底より水の出つる様爲し置くべし此れにて惡水中の生虫或はごみは取り去られて清水と成り出つるあり此の清水を釜に入れて百廿度迄沸れば藥用の水とありて人身に益あると甚し

○糊細具を鼠の食はざる法

糊の中にごんにやく玉を入れ置くは鼠食はざる者あり

○硝子又は茶碗こつぷ等を付く法

硝子又は茶碗こつぷ其外此の種の者を付くには南瓜のへたをたゝきはあせはねばりたる液出つる者あり此の液にてつぎ六時しつかにすへ置き然る後用ゆればつき目美麗にして又破ると無し

○染みたる齒を即座に白齒どのる方

笹の葉を黒く焼き其灰とあらざるを指に付けて磨けば即座に白齒とあると妙あり

○夜中用事アル時何時にても時を指して起の法

何時にて起きんと思ふ時を心に定め念閨に入り男子は左の手の裏女は右の手の内に指を以て大の字を三遍書き夫れを定め其後左の歌を三遍讀べし

打どけてもしもまどろむ事あらは引おどろかせ我枕神

と唱へ置く時は望の時間に起ると妙也

○酒毒を消す法

極上の美濃柿をひらひて臍に當酒を飲べし何程飲ても酔はず又酒毒に當らるゝ事無し

○船に酔はぬ法

航海せんとする人は左の心得を以て乗船すれば決して酔はぬ者也精神を大膽にて物に案トると無かれ

飲食物は平常の通りに食し食後甲板上に出でて卅分程散歩し然る後は任意寝るも如何にするの宜ろし食後其儘寝る時は酔ふ者あり

別大風大雨の時に非されは成べく甲板上に出て清潔なる空氣をこくらすべし 右の心得を以て乗船すれば酔はぬ者あり

又船に酔ひ安き人は喫烟すべからず

○鼠を去る法

座敷中の土を取りて泥とし鼠穴をふさげば百日間に鼠悉く去る

べし

○衣服に油の付きたるを落す法

衣服に油の付きたる時は蘿蔔のをろし汁をもみ付熱湯にて洗ひそゞげば速に落る者あり

○疊に油付きたるを落す法

疊に油こぼれたる時は速に水を流すべし油こどどく浮ぶ所をふくべし

○疊に墨みこぼれたるを落す法

疊に墨のこぼれたる時は速に水を流せば油と同じ如く浮ぶ也又墨こぼれて久しきりたるは水をかけて燈心を以てこすり落すべし

○鼠のかトラぬ様

甘草を煎ト出してぬるべしかしらる者あり

○庭にをころもち土を上げぬ法

をころもちの土を上ぐるをふせくには生魚の洗ひ汁をまきをくべし月に一度つゝ如斯すれば土龍土を持事あり

○庭に蚯蚓のわかぬ法

むくろしの實の皮を煎り出し地上にそゞべし悉く死す者あり

○虱わかぬ法

水銀貳匁ばかりを蓬一斤斗の中につゝみ其れを火にふすべ其上鳥籠をふせ衣服縹絆に二布揮ちどあまた重かけ置煙のたゆる迄ふすべ置て着るべし身に薬にて虱一疋もわくことあり但しかすかある火にてゆるくゝやるべし

○輕便晴雨を知る法

水上に唾をはくべし其唾廣かれは天氣也唾集ありて一所にあれば雨天也

○萬妙藥之部

○痔漏はれいたみ下血するには山柝の粉を吞むべし

○燒火にはしぶをぬるへし又醬油を早く塗りてよし

○耳だれには青黛黃柏等分にしてトやようを加へふさいれてよし又桃仁の黒焼を粉にして入てたし

○蟻耳の穴へ入たるには灯心を油にひたし出し入れすへし蟻必ず付て出るへし

○眉毛ぬけたるには半夏を摺つぶし水にてときぬればよし

○いぼの出来たるには桐の葉をもみて其汁を付てよし

○陰門中のかゆきには明礬蛇床子せんとあらふべし

○犬のかみたるには杏仁を能摺つぶし錢はどにまるめきずの上のせまきりに灸をすえべし

○腹いたむにはらつきよをせんゝ吞べし

○疱瘡かるくさせんと思たゝ正月にかざりたるところをせんト
行水をさすべし

○首筋の違ひ又うち身等には錦木をせんじ呑べし

○ひやうそには梅干を墨焼にして取餅にて能ねりつけてよし

○蛇のかみたるには生姜をおろし其所に付てよし

○吐血するには髪の毛を墨焼にして度々呑むべし

○痲病をわすらはぬ法はへびいちごを五月五日の朝つゆにあて
一ツ呑む

又七月七日の朝雪隠をよく掃除しそらめんをゆで家内の人數に
わけて盈にのせそれをせついんの外にてそあへ晝後此を食すべ
し

○中風起ぬ妙薬には水萍を影干にして粉にちし蜂蜜にて丸トす
ぐに酒にて呑むべし是六十六種の風を治す

○口中くさきにし白芷びやくしを粉にして食後に口中にふくみてよし
○酒にあたりたるにはしほを齒にぬり口を二三度すゝぎてよし
○河豚のあたりたるには鰯のせんじ汁よし
又藍の汁を呑てよし又明礬を水にて呑もよしまた砂糖を食して
よし

● 潮満干時刻表

		満	干
十一日 日 大汐	晚朝 六時四十八分	十二時 四十八分	
十二日 日 同	晚朝 七時三十六分	一時 三十六分	
十三日 日 中汐	晚朝 八時二十四分	二時 二十四分	
十四日 日 同	晚朝 九時十二分	三時 十二分	

廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	廿十	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十
日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同
晚朝 十時	晚朝 十時四十八分	晚朝 十一時三十六分	晚朝 十二時二十四分	夜晝 一時十二分	夜晝 二時	夜晝 二時四十八分	夜晝 三時三十六分	夜晝 三時二十四分	夜晝 四時	夜晝 四時二十四分	夜晝 五時	夜晝 五時三十六分	夜晝 六時二十四分	夜晝 七時	夜晝 七時二十四分
四時	四時四十八分	五時三十六分	六時二十四分												

歲德神

○方位之部

とし德神年々方位

廿五	廿六	廿七	廿八	廿九	三十
日日同	日日同	日日同	日日同	日日同	日日同
夜晝 六時	夜晝 六時	夜晝 五時十二分	夜晝 五時	夜晝 四時	夜晝 四時
時	時	時	時	時	時

甲巳のときは 寅卯のあいだ	乙庚のときは 申酉のあいだ
丙辛戌癸の年は 巳午の間	丁壬のとしに 亥子の間あり

年徳神は素盞雄尊すさのおのむねの後妃稻田姫いなたひめと申又陰陽家には天竺九相國てんじくきゅうさうこくの王たうと王午頭てんのう天王てんのうの後きさきほり頗利塞女さいじよ婆羅はらともいふすきはち八將神の御母にして端正美麗慈悲柔和の御神あれば此神の在す方を惠方といひて間出わたまし其外萬事に用ひて大によし甲巳のとしは寅卯の間木の方に在せり乙庚のとしは申酉の間金の方に在せり戊癸の年は土にて中央あれば方角の配當をさゆへ巳午の間とす丁壬のとしは亥子の間水の方に在せり

○金神七殺之事并に遊行日。間日

金神

甲の年は午未の方	乙の年れ辰の方
丙の年は子丑寅の方	丁の年は寅卯の方
辛の年は卯午未の方	戊の年は申酉の方
丁の年は戌亥の方	癸の年は子丑の方

世俗に
六方金神さいへり

金神は金氣の精にして本地は金剛薩陲愛染明王こんごうさつどあいせんめつましどうたうたう同体ありと申せりわけてあら神にしませは家作轉宅わたまし婚禮惣して何事も慎むべし強て犯せば七人の眷族まで取殺すもし其數足ざれば其隣をそへて七人の數とし殺す是を金神の七殺といへり恐縮むべし但し遊行日あり其間は用ひてもくるしからず

○金神遊行日

春は 乙卯日より六日が
夏は 丙午の日より六日が
秋は 辛酉の日より六日
冬は 壬子の日より六日
が
あいた東にあそぶ
あいた南にあそぶ
あいた西にあそぶ
あいた北にあそぶ

○同間日

春は丑の日 夏は申の日 秋は未の日 冬は酉の日
又一説には遊行日として用ひて來る日あり是方位の遊行あり

甲寅日より 五日の間 丙寅日より 五日のあいだ
亥巳の午方 寅卯の方

戊寅日より

五日のあいだ
丑未辰戌の方

庚寅日より

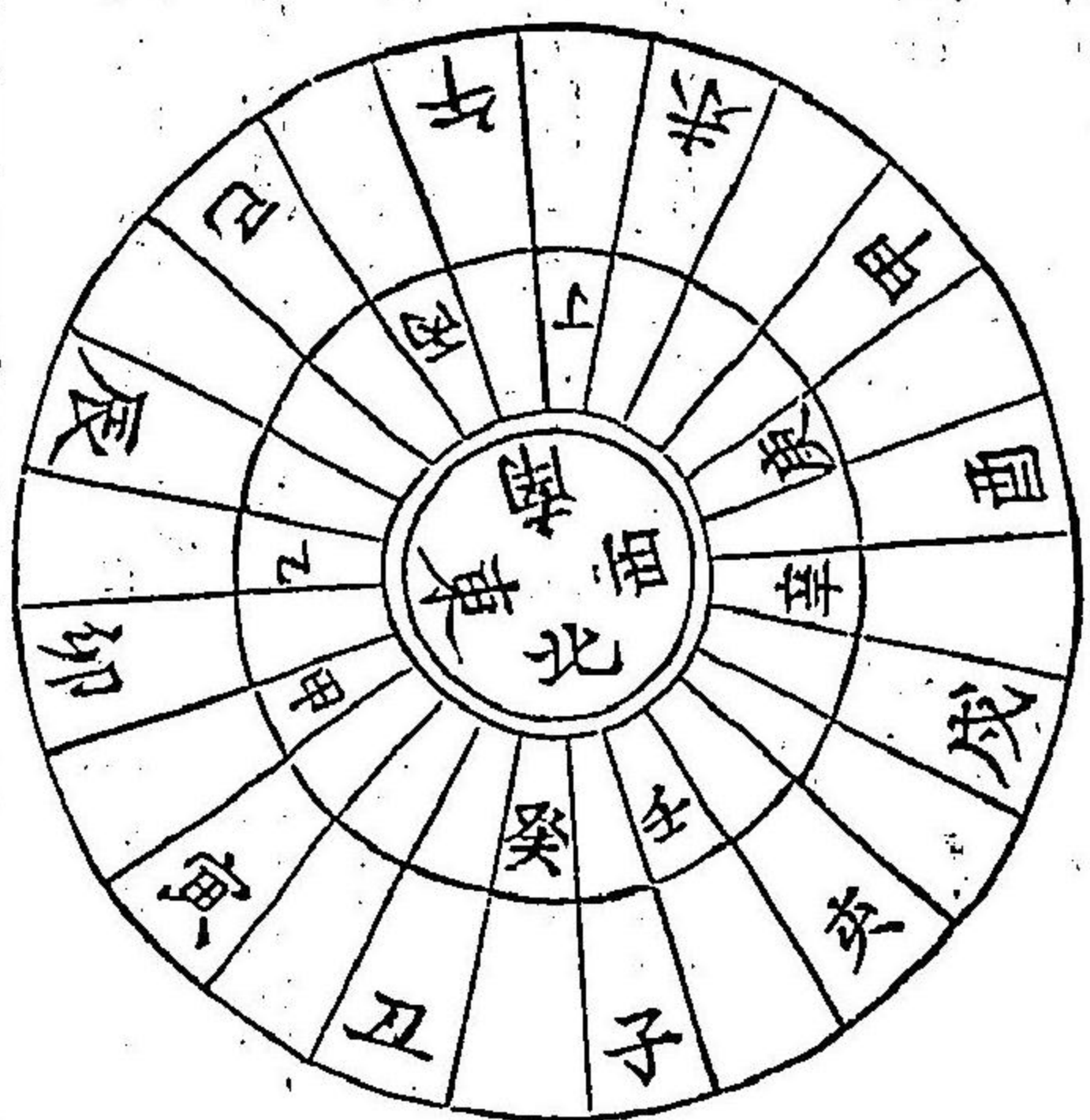
五日のあいだ
亥子の方

壬寅日より

寅卯の方

無據事あらば右遊行遊行の方角を考へ用ゆべし

年々歳徳金神方位并に金神間日



甲巳のとしは としとく 寅卯の間
こんじん 午未申酉の方

乙庚のとしは としとく 申酉の間
こんじん 辰巳の方

丙辛のとしは としとく 巳午の間
こんじん 寅卯午未の方

丁壬のとしは としとく 亥子の間
こんじん 寅卯戌亥の方

戊癸のとしは としとく 巳午の間
こんじん 子丑申酉の方

金神間日 春丑の日 夏申の日

秋 未の日 冬 酉の日

○八將神の解

大歳神

子のとしは子の方

午のとしは午の方

丑のとしは丑の方

未のとしは未の方

寅のとしは寅の方

申のとしは申の方

卯のとしは卯の方

酉のとしは酉の方

辰のとしは辰の方

戌のとしは戌の方

巳のとしは巳の方

亥のとしは亥の方

八將神と申すは牛頭天王の皇子にして頗利塞女の産玉ふ所あり
中にて大歳神と申は木星の精あり此方に向ひ萬より但し木をき
らず木星の精あればあり此神を歳君と云ふ

大將軍

寅卯辰の年は

巳午未の年は

子の方北にいます

卯の方東にいます

申酉戌のとしは

亥子丑のとしは

午の方南にいます

酉の方西にいます

大將軍は太白星の精あり此方わけて怕つゝしむべし其ゆへは太白星は金氣の精にて金は殺伐をつかさどればありざるによつて此方にむかへ造作またまし井堀かまどぬり等惡し亦此方へ死人をおくべからず俗にいふ三年ふさがりどていむは此方よりみたりにおかしそむけば祟はあはたしきゆへに曆にもふさがりと記す大事の方あり但し遊行日あり左にします

春

甲子の日より東にあそぶと五日にして

夏

丙子の日より南にあそぶと五日にして

秋

庚子の日より西にあそぶと五日にして

冬

壬子の日より北にあそぶと五日にして

土用

戌子の日中央にあそぶと五日にして

右大將軍

は一所に三年づゝいませば三年ふさがりとふ然れ共

遊行日の間は本所に障あし其かはり又遊行の方をふさがりとす春は甲子の日より五日か間東をふさがりとす余は准して知べし大將軍の方を用ひて叶はざる時は遊行日を考へて用ゆべしさるによりて亦遊行の方を深く恐つゝしむ萬事を用ゆべからず

大陰神

子のとしは戌の方

午のとしは辰の方

丑のとしは亥の方

未のとしは巳の方

寅のとしは子の方

申のとしは午の方

卯のとしは丑の方

酉のとしは未の方

辰のとしは卯の方

戌のとしは申の方

巳のとしは卯の方 亥のとしは 酉の方

大陰神は土星の精にして此神女体にてましませは此方に向ひて産をすべからず婚禮その外すべて女の事に用ゆべからず其余はさらに障かし午の方に在すとしは大豊年あり子の方に在す年の作物登うすし

歳 刑 神

子のとしは 卯の方 午のとしは 酉の方

丑のとしは 辰の方 未のとしは 戌の方

亥のとしは 巳の方 申のとしは 亥の方

卯のとしは 午の方 酉のとしは 子の方

辰のとしは 未の方 戌のとしは 丑の方

巳のとしは 申の方 亥のとしは 寅の方

歳刑神とせうしんは水星の精あり殺伐をつかさどる方あれば此方に向ひて

一切の種をまかず土を動す事を忌むべし未の方申の方に當る年は中年あり子の方にあたる年は雨をほし卯の方にあたる年は雷をほし慎むべし

歳破神

子のとしは 午の方 午のとしは 子の方

丑のとしは 未の方 未のとしは 丑の方

寅のとしは 申の方 申のとしは 寅の方

卯のとしは 酉の方 酉のとしは 卯の方

辰のとしは 戌の方 戌のとしは 辰の方

巳のとしは 亥の方 亥のとしは 巳の方

歳破神は土星の精あり大歳神の向ひに在り此方に向ひ船にのらずわたましせず牛馬畜類もとめず寅申巳亥のとしはどかめあし子午卯酉のとしは輕し丑未辰戌の年はねもし辰巳の方にあたる

年は秋大風あり丑寅の方にあたるとしは豊年あり

歳殺神

子のとしは	未の方	午のとしは	丑の方
丑のとしは	申の方	未のとしは	寅の方
寅のとしは	酉の方	申のとしは	卯の方
卯のとしは	戌の方	酉のとしは	辰の方
辰のとしは	亥の方	戌のとしは	巳の方
巳のとしは	子の方	亥のとしは	午の方

歳殺神は金星の精にして本地大威徳明王と申せり此神わけて殺伐を専ら司どり玉は別して恐れつゝしみ犯すべからず就中嫁をむかへとる事を忌むべし子の方にあれば夏雨多し午の方であれば夏の比雷多く秋に風多けれど五穀は豊作あるべし

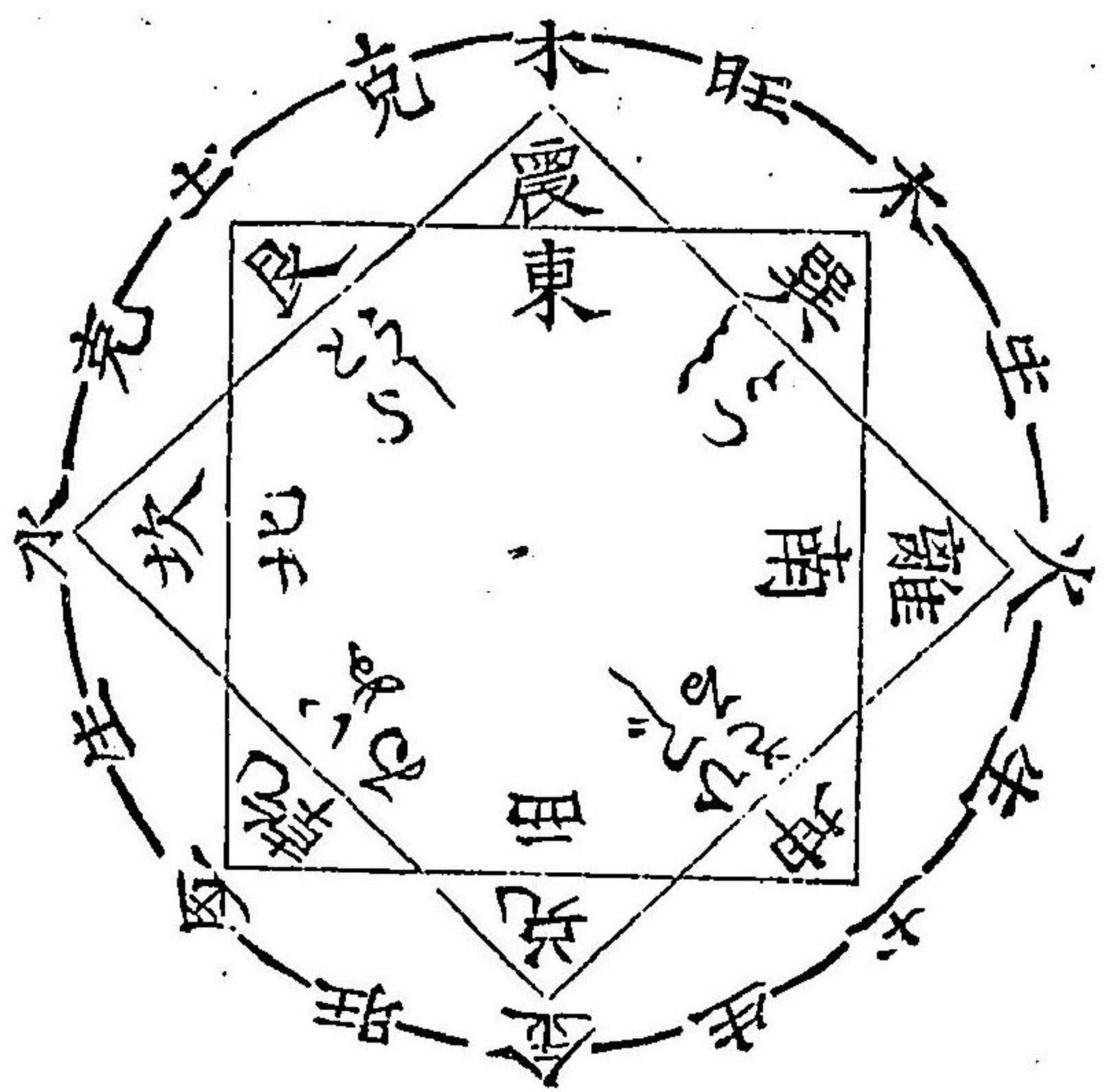
黄幡神

子のとしは	辰の方	午のとしは	戌の方
丑のとしは	巳の方	未のとしは	亥の方
寅のとしは	午の方	申のとしは	子の方
卯のとしは	未の方	酉のとしは	丑の方
辰のとしは	申の方	戌のとしは	寅の方
巳のとしは	酉の方	亥のとしは	卯の方

黄幡神は羅喉星の精にして本地は摩利支天ありと申せり土をつかさどる神ゆへ土の色を以て黄幡神と號かるがゆへに門を建土を動し土をどるに用べからず此方に向ひ弓を射そむるによし又陣幕をひらき初るも大によし財寶を出し納る等には大に忌とるべし

豹尾神

子のとしは 戌の方 午のとしは 辰の方



圖の如く震の卦より白茶廻り
 にくれば七卦までは相生し又
 相旺すれば艮の卦は前後とも
 相克すこれを鬼門と云ふ

鬼門を除る方圖



圖のごとく艮の一卦を欠と
 きは前後ともに相生するあ
 りこれ艮を除る口傳あり委
 く左にしるす

右の圖の如く東方は震の卦にて木に屬す東南は巽の卦にて木に

方位之部

屬す是木旺木にてよし又南は離の卦にて火に屬す巽の木より木
生火と相生して大によし南西は坤の卦にて土に屬す南の火より
火生土と相生して大によし西は兌の卦にて金に屬す坤の上より
土生金と相生して大によし西北は乾の卦にて金に屬す兌の金よ
り金旺金と旺してよし旺はさかん成といふ字あり扱北は坎の卦
にて水に屬す乾の金より金生水にて大によし然るに北東る艮の
卦にて土に屬す北の水よりは土克水と克して大にあしく又東の
木よりは木克土と克して大に悪し故に此角を鬼門と號て甚だ忌
恐るゝありされども圖のとく艮の角を欠ときは北の水より東の
木へ水生木と相生して大によし家造る北東の角を欠は此謂あり
と知べし

○本命的殺ノ秘決

りれ本命的殺の方位は人間に祟る金神大將軍鬼門等よりも甚し

といへども古より未だ是を見出す者あかりしに近來清人は是を考
へ出し世人に教示して其災害を避しむ其法 皇朝へ傳はりて易
者方位家の秘事として妄に其法を漏さずといへども普く世の人
の爲あれば爰に早練の秘法を記す事左の如し

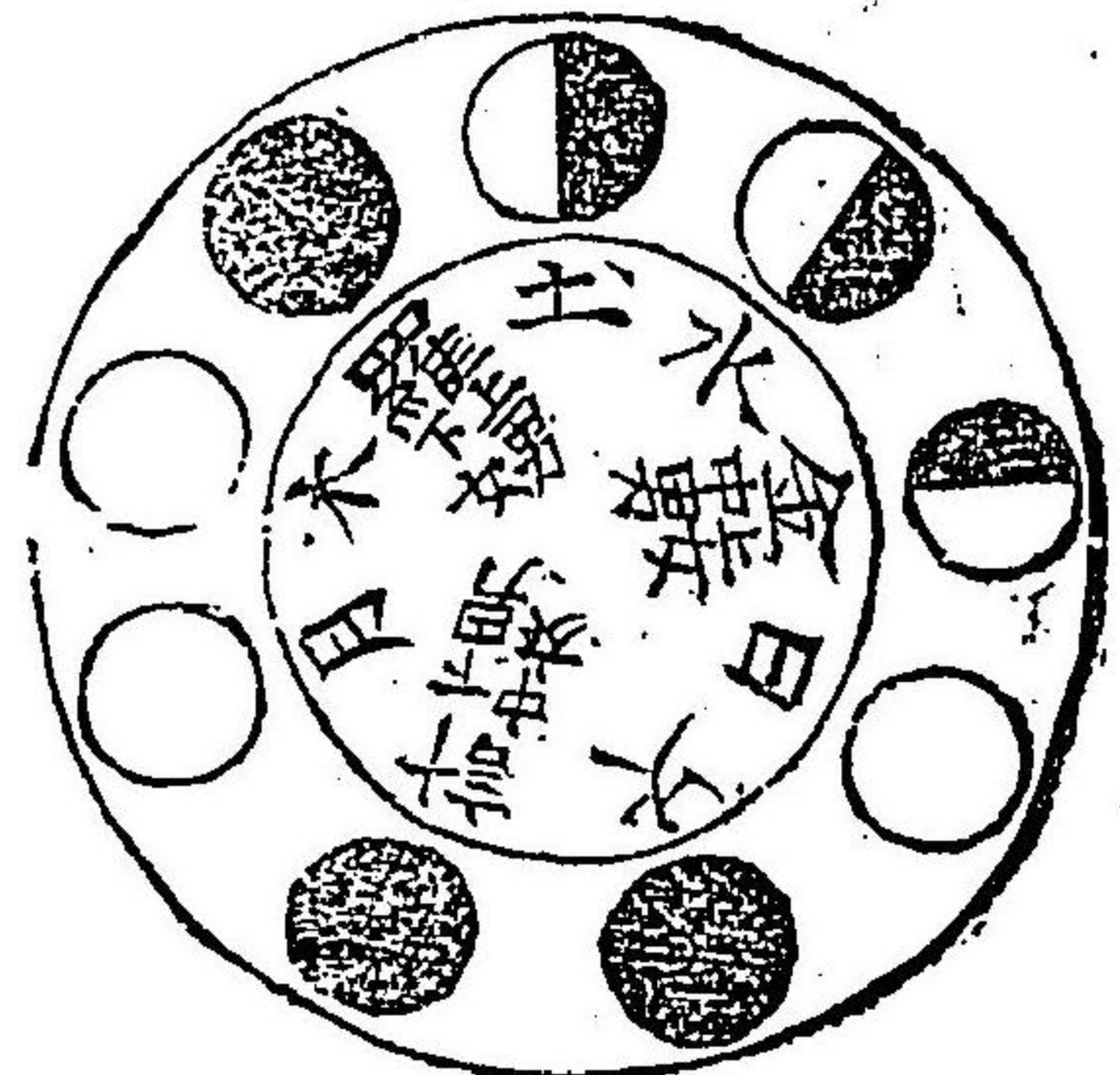
- 二北 うしろ 四良 うしろ 九東 あづま 八巽 たつみ 三南 みなみ 一坤 しつじま 五西 にし 六乾 いぬ

右的殺の練様は其人の年の數と九拂にして残る數を以て知之た
とへば三拾五才の人其年の的殺を知んとあらば卅五の内三九廿
七引は八ッ残る是巽の方は本命的殺也此例にて二ッ残るは北四
残るは艮と右に引合してしるべし的殺の方に向ひ萬事すべから
ず殃害甚し恐るべし

○九曜星の練様

九よりの星をくるにはをとこも女も順にばかり計へめくるべし

トゆんといふは左より右へ弓ひきにかぞふる也



○羅喉 此ほしにあたりたるとしは口舌あるべし腹中を煩ひては親類のうち年寄たる人にはなるゝか人と口説あるべきありつゝしみてよし正四五月はやまひか損かくせつ有七月はぬす人にあふ事有十月はやまひ事有べし信心すべし

上段のむまれのをとこは
 羅喉のほしよりかぞへ
 中段のむまれのをとこは
 金曜のほしよりかぞへ
 下段のむまれのをとこは
 計都のほしよりかぞへ
 上段のむまれの女は
 金曜のほしよりかぞへ
 中段のむまれの女は
 計都のほしよりかぞへ
 下段のむまれの女は
 羅喉のほしよりかぞへ

○土曜 此ほしにあたりたるとしは口舌あるべし腹中を煩ひて悩むことあり男はゝれもの女はゝらむとあるべし正三五月はやまひごとあるか父母にきづかひあり公事沙汰して損をする事あり無病ある家にはうれぬごとあり又は家やしきにはあるゝか八九月には夫婦の中に口舌ありよくゝ慎しみてよし

○水曜 此ほしにあたりたるとしは誠の心をこして信心のともからは内か外に悦び事あり財寶を求るにもあきなひのみちにもし去ながら海川とつゝしみてよし二三月は水損かやまひごとか子にきづかひあり四五月は口舌ありやまひ事ぬすびと事か六七月は船川をつゝしむべし観音をしんどんしてよし

○金曜 此ほしにあたりたるとしはあしき事とさく親類に年よりに憂あるか口舌あり人と口舌事ありて刃物たちかたきにてけがするか金物よりあつかひ悪し信心のともからは諸事お付利徳あり

春の中旅へ出て悪し四月は損するか子どもに付て憂ひあるか夫婦にさいふあるか五六月も旅へいでよし

○日曜 此ほしにあたるとしは萬の事よし財寶にも縁あり下人も多く抱へ子供たんどやうあるべし商人も此ほしにあたれば賣買のとをまし利徳十分ある信心のともがらは五六七月に寶を得るとあり旅へ出てよし不信心の輩は冬三月に病事か妻子につきてらんするかくせづか食たゝりする事あるべし觀音をえんどんしてよし

○火曜 此ほしにあたるとしは旅をしてゐるし病事あり望みことにつきてわざわひあり損する事ありもしえからすんは親類にとしよりたる人にはある、事あり二三五七九十一月に火事かやまひかうれぬ事か思ひとあるべし

○計都 此ほしにあたるとしは萬わろし災難きたる事あるべし

くせつ事あり損する事あり頭に煩ひ有べし女人はとり分災ひあり慎しむべし正二三月は病事有住所に口舌か損する事あり八月は南へ行はたゝる九月財寶に付てゐろし十月ぬす人にあふ口舌あるべし

○月曜 此ほしにあたる年は萬よし貴人に縁あり萬人の中よりぬき出されはうびを取こどあるべしされとも少もいつめる心ありては大に悪しうごきはたらくによき年也旅するによし思ひよらざる歡び事にあふとしかり去ちから不信心の人は火難水難あり慎むべし鼻か口中か腹中かを煩ふとし也三月は病冬の中に損するか住所にはあれるかうれひあるべし

○木曜 此ほしにあたるとしは萬よし心正直にもち物とゆやぶさるやうにする時は財寶をぬる事あるべし少しの災ひも消る也大なる災も小ある也家のうちも賑くして晴やかあるべし去ちら

ことしは大木を切るべからずもし切るときは病あるべし二八月に大木きるべからず牛馬にたゝるか口舌するか正三六九月には利徳あり七月腹のうちのわづらひあり冬の中損する事多しやまひとあるべし

三月塞の方位

春三月は東の方夏三月は南の方秋三月は西の方冬三月は北の方
右三月ふさがりを三月金神ともいふ尤忌べき方位あり

月ふさがりの方位

正五九月は 北ふさがり 二六十月は 東ふさがり
三七十一月は 南ふさがり 四八十二月は 西ふさがり

日塞の方位

巳酉丑の日は 西ふさがり 卯亥未の日は 東ふさがり
寅午戌の日は 南ふさがり 申子辰の日は 北ふさがり

時塞の方位

子の日は子の方ふさがり 丑の日は丑の方ふさがり
余は是に准ト其日くくの支にあたる方角を忌べし

土公神

どかうじん土公神と申は本地堅牢地神の御事と申せり是を三寶荒神と崇め
かまど いはひ竈に祠こめて家毎に祭るあり此土公神土中に居玉ふ四季によりて寸尺あり春は竈にあり夏は門にあり秋は井にあり冬は庭にあり其居玉ふ所を決して犯すべからず其たゞりはあはだ速なり

十方暮

十方暮は十干と十二支と相克するもの多く比和するもの少し八專のうらちあり甲申に入は甲は木申は金金克木あり癸は水巳は火水克火あり如斯相克するもの多しかるがゆへに曇がちあり但し十方曇の終は天一天上あり

世俗に十方くれに雨ふらすさいひて多分くもりがちにて大雨すくなし

弘法大師四目録の占

生産	出行	待人	得物	八卦
おとこ	くやむ	はやく きたる	おろし	三 り
女	よろこぶ	きたる	ありすこし	八 こん
女	よろこぶ	きたら ず	あり	二 だ
おとこ	よし	おそし きたる	あり	一 けん
女	よし	きたる	あし	六 かん
女	よろこぶ	きた らず	おろし	七 こん
おとこ	よろこぶ	きたる	おろし	四 けん
おとこ	くゆる	おそし	あし	五 りん

呪咀	患病	生死靈	月ヲ指	一二ヲ指	善悪
かう どん	よし	女いき れう	らい げつ	一よし 二半吉	あし
ほらし のらふ	あが びく	女 えれう	今月	二よし 半吉	よし
きんほう ふじやう	あやう	女の れう	今月	一よる 二あし	よし
くわん たゝる	よし	女の れう	らい げつ	一半吉 二あし	あし
萬事 よし	おそし	女の いきれう	今月	一よし 二半吉	よし
くわら どん	半よし	女の いきれう	今月	一よし 二よし	あし
女の のらふ	おそし	いき れう	今月	一よし 二よし	よし
女の のらふ	すこし	いき れう	らい げつ	一あし 二よし	あし

物色	生死	失物	輕重	時指	方角
あかし まろし	ます	うせ ださ	たも かる	みつ ひつ	きた にし
まろ まき	いさる	か くす	かるし	とら さる	み きた
あを くろ	いさる	か くす	かるし	とう	ひ きた
あを しろ	いさる	か す	かるし	ね たつ	ひ がし
くろ しろ	ます	うせ たつ	ね もし	ね うら	きた にし
あか しろ	いさる	人 に	かるし	ひ つ	み きた
あか しろ	ます	うせ か	ね もし	ね うら	み きた
あか しろ	ます	同上	ね もし	とら うら	きた にし

勝負	邪崇	四二足
かつ	ほ とけ	四 そく
かつ	山 かみ	い かり
まける	ふ ど	四 そく
半よし	か み	四 そく
半よし	ト や	あ し
かつ	ゆ みや	二 そく
半よし	ほ うし	四 そく
かつ	い き	二 そく

右うらみひやは年と月と日と時とを合せ八ばらひにしこの
 數を八卦の所ふて合せおもふ事をうらみふかりたとへば出産の
 占をたのむ人の年卅二才あらばそるばんに卅二とおき其月正月
 からは卅二の上へ一をくわへ其日十五日あらば又右の上へ十五
 をくわへ其時四ツ時あらは又四をくわへ惣數五十二とある是を
 八ツづゝとりはらへばあとに四ツのあるこれ震の封ありすきは

ち出産は男子ありと判断すべし又失物の占を頼む人廿三才ならば廿三とおき其月五月ならば五をくわへ十八日からは十八をくわへ七ツ時あらば七をくわへ惣數五十三とあるこれを八ツづゝはらへば五ツ残る是巽の卦あり失物うせずかくさず置取を忘れしありと云聞すべし余は皆准トて知べし

●夢はんど并に悪夢を轉ずる法

夢の説和漢の識者種々に説を立或は有とし或はなしとしさらに一定せず五臓のわつらひちと見破る人もあれとすでに周禮にも占夢の官をわかれたり殷の湯王は夢によりて伊尹といふ賢人を抱へ周の文王は夢によりて大公望といふ軍師を得玉へり其外和漢夢によりて吉凶を悟りし人數をしらずされば假寝の夢といへども深く考へたもんばからずんばある可らず茲に擧る夢はんどは古人の占ひ考へて吉凶をためせしものをいだすこれらにより

- てたもひをめぐらさば千萬の夢をもあらかトめ其吉凶をしる楷梯とあるべし能々かんがへさるとるへし古人判断の夢を左に記す
- 一 天にのぼると見れば大いにたつとき身とあるべし
 - 一 空晴るとみれば大によし
 - 一 病人そらはれるとみれば病本復すべし
 - 一 そらわかくあるとみれば大によし
 - 一 月日たつるとみれば父母をうしあふ
 - 一 月日をのびと見れば大にたつとき子をまうく
 - 一 雪ふると見れば大によし
 - 一 かみかりにうたるゝと見れば大によし
 - 一 夢にかみかりを聞と見れば立身すべし
 - 一 霜のふるを見ればあしゝ
 - 一 雨にあふと見れば酒食をふれまはるゝあり

- 一地震ゆると見れば出世すべし
- 一夢に大石を見れば財を得べし
- 一大石を庭にすゆると見れば大によし
- 一土の中に居ると見れば大によし
- 一溝をほらすと見れば大によし
- 一山くづると見ればはきはだわろし
- 一洞のうちへ入ると見ればよし
- 一木をうゆると見れば大によし
- 一座敷に樹木はへると見れば大にわろし
- 一米をかむと見れば大によし
- 一黒雲まひさがると見れば病をわづらふべし
- 一大木をにあふと見れば大によし
- 一門内に木生とみれば大によし

- 一桑の木を夢に見れば子に病いづるあり
- 一梨をくふと見れば夫婦りべつすへし
- 一髪を結と見れば大によし
- 一ぐみの木はゆると見れば大によし
- 一柿を喰と見れば病あり
- 一神を拜すると見れば大によし
- 一貴人の前へいづる見れば大によし
- 一髪しらかとあると見ればはきはだよし
- 一刀を人にやると見れば大にわろし
- 一我そはに刀脇さしあると見れば大によし
- 一高き亭に居ると見れば大によし
- 一新宅へうつると見れば大によし
- 一齒ぬけると見れば親類にうれひあり

夢はんじ井に悪夢を轉する法

- 一 あたらしき小袖をきると見れば大によし
- 一 簞笠をきると見れば大によし
- 一 女ゆめに刀をさすとみれば大によし
- 一 刀をどくと見れば大によし
- 一 頭痛すると見れば出世す
- 一 髪ぬける見たば我子にたゞるべし
- 一 顔に瘡できると見れば大によし
- 一 汗出ると見れば大にわるし
- 一 井戸かへするとみればよし
- 一 風吹と見れば病あり
- 一 水をくむと見れば大によし
- 一 井戸をのどき水を見れば大によし
- 一 盃を見ればよき子をまうく

- 一 米俵をゑると見れば大によし
- 一 糸のむぐと見れば大によし
- 一 鏡をもらふと見ればよき子をまうく
- 一 鏡を見れば大によし
- 一 門の戸われると見れば下人家出すべし
- 一 煤はきすると見ればよし
- 一 たゝみの上を蟻がはふと見れをあしゝ
- 一 毛氈を見れば大によし
- 一 帆かけ船を見れば大によし
- 一 のりもののにのると見れば大によし
- 一 ひろき道を往と見れば大によし
- 一 橋柱たれると見れば妻をうしあふ
- 一 酒宴するとみれば大によし

- 一 女の乳をのむと見れば大によし
- 一 飴を喰とみればあし
- 一 一切の菓を喰とみればあし
- 一 喪服を着ると見れば出世すべし
- 一 葬禮を見れば悦びあり
- 一 泣と見れば大によし
- 一 琵琶をたんと見れば他人より幸きたる
- 一 書物をよむと見れば大によし
- 一 弓矢を持とみれば大によし
- 一 弓の弦されると見れば兄弟にわかる事あり
- 一 草花をとるとみれば大によし
- 一 旭いづると見れば大吉事あり
- 一 星いづるとみれば大によし

- 一 玉を得ると見ればよき子をまうくべし
- 一 米そらより降とみれば大によし
- 一 鼓うつと見ればわろし
- 一 人内よりいつるとみればよし
- 一 人あつまると見れば身に病いづる事あり
- 一 谷川の水をのむと見れば富貴する
- 一 山くずると見ればおどろく事出事る
- 一 錦を裁と見れば大によし
- 一 糸を繰ると見ればむつかしき事出さたる
- 一 杖つくと見れば病あり
- 一 鳥居を見れば富貴する
- 一 海をたよぐと見れば大によし
- 一 雨ふると見れば萬事心にかちふあり

夢はんじ井に悪夢を轉する法

- 一やねの上にいると見れば萬よし
- 一錢をまうけると見れば大によし
- 一扇をもらうと見ればよろづさいはひきたる
- 一牢へ入ると見れば大によし
- 一網を打とみれば大によし
- 一龜を見れば富貴する
- 一作ものゝたねをまくとみればくわほうあり
- 一海の水さよくすむと見れば大によし
- 一山へのぼると見ればかあらず身にくわほうあり
- 一魚を釣と見れば大によし
- 一むかでにさゝると見ればかあらず富貴の身とする
- 一馬にのると見れば大によし
- 一熊を見ればよき子をまうく

- 一猫ねづみをとると見れば大によろこびあり
 - 一湯あみすると見れば大によし
 - 一水のながれを見ればねんだんとあふ
 - 一魚の飛を見れば身によき事あつまるあり
 - 一唐の段成式が酉陽雜俎にいはいはくわしき夢を避んとあらば主夜神の呪をかきて寢所の上にはり置て悪夢を除べしといへり主夜神の呪とは
- 婆 珊 婆 演 帝
- 右の呪をかきてはりをくべし
- 一獾といへる獸はあしきゆめを喰とて唐土にも日本にも衾に染枕にゑがけり
- 一惣トてよき夢を見じとさは三日が間人にかたらず身を清め神を祭りて

ふかく慎み幸をまつべしとあり

●生れ日の吉凶

大陽日	朔日	七日	十三日	十九日	廿五日
大陰日	二日	八日	十四日	廿日	廿六日
天父日	三日	九日	十五日	廿一日	廿七日
天母日	四日	十日	十六日	廿二日	廿八日
天帝日	五日	十一日	十七日	廿三日	廿九日
天皇日	六日	十二日	十八日	廿四日	晦日

○大やう日にむまるゝ人ははんどやうにしてちぎやうざいはぶにえんあり。又ものゝ頭らとあり人をあゝくひさまはしいせいあり。しかしまよげいはあまたあらふといへどもしやうたつする事まれあり又トやくねんにてちゝはゝにわかれきんぎする事有べし

○大いん日にむまるゝ人はぢうしよたびくかはるべしまたひとのようしむことあり。たにんのいへをつぐ事あるべし。しんしやうはふつきにしてしかもしよげいにたつし人ふうやまるゝあり。トやくねんのあいだはしんらうあれども中ねんよりしあわせあかりとしよるはどらんつよくゑいくわにくらすべし

○天父日にむまるゝ人はいのちあがし。わかき間はくらうすれどもとしよるはどきんぐざいはうあつまりゑいぐわあるべしつねにトひせんごんをささばあくトさいきんきたらす子ねほくけんぞくもよくしたがひてしそんはんどやうすべし

○天母日にむまるゝ人はしんしやうはんどやうしゝゑいぐわにくらすべし。ふつきのいへにむまれいしよくおねんありつねに人をあはれみ又ぎりをたて大氣あして人のためにきんぐとねしますゆへにきんぐをたもちがたし。それゆへ人のもちひれ

もし。さんくをれしむ心あれをうれひ事ありてたびくそん
しつすべし

○天帝日にうまる、人は位たかくいせいあるしやうあり。しか
れどもち、は、にた、りて早くわかるべし。よ、つ、しめばれ
どこはよきつまをまうく。女はおやのいへやしきにすめばた、
りありたにんにかしつきてよし。さもあぐはべつに家やしきを
もとめようしすればとがめあぐはんとやうすべし

○天皇日にむまる、人は。おとこはよきつまにねんあり。女はお
つとにぬ、りはある、事あり。男女ともうまれつき、だてされ
いにていやしき心あり。又いとあみもいやしきはよるしか
らず。いかにもされいあるしやうばいをすべし。た、しきやうだ
いのねんうすくしてびやうしんあるべし。う、かみをしん、
すればむびやうちようめいあり

●生れ月善悪

正月に生する人は前生にてかう花を佛にくようし。又くびく、
り死んとせし人をたすけしゆへ今生にて天道より福德をくだし
身上よく名をあらはす。夫妻のねん初はかはりのちにさだまる
そりやうの子は育がたし

二月に生る、人は前生にて經千卷を寺へあげたるくどくにて心
だてよく貴人とまどはり人お敬はる又前生にて牛をころしたる
むくひにて父母にはやくはある、事有子もりだちがたしよく
せんごんをすへし

三月に生る、人は前生にて寺方の茶碗五十人前かりてかへさず
又老人の衣服をかりてかへさるむくひにて今生にて父母兄弟
の縁薄し寺方へ物をあげ老人に衣ふくを施しつみをはらひせん
ごんをしてよし

四月に生るゝ人は前生にて寺の焼るにかけつけ大藏經七部を出し又橋より落る人を助しくとくにて今生にて財寶に富知行に縁あり子丑のとしにあたらをいよくしあはせよしいづれもとしよるほどさかゆべし

五月に生るゝ人は前生にて佛の臺坐と。きしんしたるくとくにて今生にて衣食たり手に藝ありて金銀あつまり命長し又前生にて僧に酒肴をあたへ破戒させしむくひにて父母兄弟にはあるゝ事あるべし

六月に生るゝ人は前生にて杉の木十本植奉らんと神に願かけて植す寺の油を九升かりてかへさるゝむくひにて今生にて身上あしく病身あり氏神へ樹木をあげ寺へ油をあげ施しせんごんしてつみをつくあふべし

七月に生るゝ人は前生にて主人より施行に引錢をわたくしきた

るむくひにて今生に思はぬ損を去身上おもはしからず旅他國にてくらうし子にぬんうすしよきたてるとあるべしゆへに慈悲せんごんしてよし

八月に生るゝ人は前生にて身を投死する人を助しくとくにより今生にて衣食にぬんあり然ども僧に金を借てかへさるゝむくひにて子に縁うすく身上やぶるゝ事あり僧に銀子を施しつみをまぬかのべし

九月に生るゝ人は前生にて佛に花を供じ又首くゝる人を助しくとくにて今生にて衣食あまり有但し前生にて寺の油三升かりてかへさるゝ科にて父母兄弟に縁薄く目を煩ふ事有せんごんしてよし

十月に生るゝ人は前生にて殺生をこのみたるむくひにて今生にて父母妻子にはあるゝ事有但し前世にて油一斗錢五べ文を僧に

施したるくどくにて衣食に乏んあり物の命をたすけせんごんせ
ばよし

十一月に生るゝ人は前生にて酒肴を以て僧を破戒させしむくひ
にて今生にてはらの病有り然ども前生にて農人に牛一疋をあた
へたるくどくにて中年より仕合せありとしよるほどさかゆべ
し僧に施しをしてよし

十二月に生しゝ人は前生にて出家にてありしが隣の鶏を盗み又
肉食を好みたるゆへに今生にて子をそだちがたし又燈明を吹け
したるむくひにて目を煩ふ事あり僧をくようしドひせんこんを
せはつみ消てさかゆるべし

●うまれ時善悪

夜の九ツハ 子のとき 夜の八ツハ 丑のとき
夜の七ツハ 寅のとき 朝の六ツハ 卯のとき

晝の五ツハ 辰のとき 晝の四ツハ 巳のとき

晝の九ツハ 午のとき 晝の八ツハ 未のとき

晝の七ツハ 申のとき 暮の六ツハ 酉のとき

夜の五ツハ 戌のとき 夜の四ツハ 亥のとき

●子の時に生るゝ人は命ながし但し父母に早くはあるゝ事有。
又兄弟中あしくしんぞくの力を得がたし。トぶんはげみてしい
だすべし諸藝をあらへどもすへどげがたし。此人は寂しき所に
すむ事を好む性あるべし

●丑の時に生る人はちろかしくく學文を好む衣食ともしからず
年よるほど金錢あつまりるいづはすべし又侍は文武りやうどら
にたつしめいよをあらはし知行をまし子孫はんドやうすべし

●寅の時に生るゝ人は若年のころは彼方こあたどかけまはりく
らうする事多し、としよるほど仕合よくはんじやうすべしみや

づかへの身はくわんる知行をまし財寶心のまゝにて人にうやまはれぬせいあるべし

●卯の時に生るゝ人は心だていやしからず生國にはすみがたし他國に住居すべし。たして生國にすめばたゞりて病身とありそんしつあり。ゆへにたびたこくをかけ廻りかせれば金銀ざいはう心のまゝなるべし

辰の時に生るゝ人は心ひろく大氣あり大事にあへとも小事と變し悪事も吉事とあるべし但し兄弟えんうすく力を得がたしつまのねんもたびくかはるべし慈悲せんごんをあし神佛をしんトてよし

己の時に生るゝ人は生得心いらちたんきありしかし仕官の身は手柄多く名をあらはし加増をうる事あり。又人の家とくを得て思はぬ幸はひを得べし。ゆへにしんるいの力をからず自身上

をたもつべし

●午の時に生るゝ人は智慧へさいかく有て諸藝手跡學文を好む。まかし父母兄弟妻子にえんうすくたゞりはあるゝ事有。とかく家に居ては仕合あしく旅たこくしてかせげははつたつすべし
●未の時に生るゝ人は身上うさしづみ度々あり若き時はしんらう多く年よるほとよし貴人に近付えいぐわすべし又いあかをかけまはりかせぎて金銀ざいはう心の儘にして身そくさいにて仕合よかるへし

●申の時に生るゝ人は妻縁かはりて後男子は位たかさつまに縁あり。女はちるさいかくありて富貴ある夫にぬんありてともにさかゆべし。若年の間はかあたこあたをかけまはりくらう多くとしよるほと仕合よし

●酉の時に生るゝ人は衣食あまらあり又武士は文武兩道にたつ

亥の日 東へゆけば大によし 南へゆけばよし
西へゆけば大によし 北へ行けば大によし
他所へ行に首途の歌

さしひこそまつがみきはにこのねの
とこにはさみかつまそこひしき

●年中風雨考

- 正月十五日晴天あれを其年菓類多し正月の中より二月にいたりて東風吹こと多し又三四月の間に西北の風多かるべし
- 正月十日午の三剋は風を主の時ありもし風をければ雨降
- 同廿一日は大に雨風ある日也
- 同甲子の日雨のよくふれば其とし必ず旱すること有べし
- 同きのえにあたる日の晝前に大風吹ことあれば三日四日のうちにかからず雨降あり
- 同きのどの丑に當る日大風吹と有ば惣トて作物よろしからず

- 同ひのへひのとの日に大風あれば其年多分旱あり
- 同つちのへつちのどの日大風吹ば大に五穀あしく
- 同かのへかのとの日に大風吹ば草木むしづくありこれらは正月にかからず四季とも同しことあり考へ見るべし
- 又丑申高に己豊年といふことあり丑申の日の九ツ時までし東南の方に少しも雲あくて晴わたるは豊年のえるし也
- 夏は子亥の日の雨はその月雨おし寅卯の日風ふけば其月晴曇れし又虹あり己午の日あたしかあればその月あつさつよかるべし未戌日くもれば其月虫多く生ず申酉の日はるれば其月氷降ことあるべし
- 五月五日雨ふれば來年にむたりてかならず豊年のえるしあり
- 夏至にいたりて西南の風吹は六月にいたりて大に暑氣つよかるべし又夏至の日北風吹は水たくさんにて米穀多し

○梅雨の後に空はれてはかからず東風吹もの也

○五月の節に入て十五日めに東南の方より風をよくと吹ば天氣次第によしたとへ雨ありとも此風にて必ずはるゝものあり

○梅雨は五月の節にいりて其日より第一番めのみづのへに入て第三ばんめのみづのへの日はあくといへりされどもいまだ治定しがたし梅雨の事は曆の部にいへる説よしたとへ梅雨に入ても山の根雲あく風つよき時は雨ふらず次第に風をさきて南風にあるときはきはめて雨降なり此雨のうちには朝東風二三日かあひだたへず吹ときは四五日のうちにまことの天氣とあるものあり

○六月三日雨一まきり降或はよるゝ風吹ば七月に至り山の篠かゝるあり

○同土用中てりつめをよくと吹風を俗に青東風と云五こくに大に薬ある風あり又晝の間はてりつめ夜にいたりて風あるも豊年

のまゐるしかりまかし西北の風強く吹は大に忌ことあり土用の内は多分東風吹ててんきよし又西風吹ものあり

○七月七日は大風ある日あり九月十五日廿七日も午の刻に風あるべし風をければ雨降べし又東の方に赤き雲氣立て西へまはるは雨あり但し朝の間にて世に是を朝やけといふ也夕やけは大氣あり朝やけは多分雨降あり

○同月西南の雲東へ入時は少ま雨あるべし足はやく北へ入ときは大雨あり又夜の内うしとらより風吹いたして雨を催しその風やまず西南の方へ廻り東南の雲黒くなることあらば跡は大風のまゐるし也

○七月夜ひやゝかあれば風をしあつけければ南風吹てあめにあることあり

○八月二日八日十七日十九日以上かからず風吹日ありもし吹ぬ

ときは雨降あり

○同社日に雨ふればらい年五こくよくみのる

○同十日より内東南の隅より雲おこり段々西北へこむるあらば大雨ふるべしもし雨降ざれば大風吹べし

○同十一日十五日十七日廿九日は必らず風吹日あり惣トて秋の日和は考がたき物也かせの涼しきが常あれどあたゝかある南風吹は雨のしるし也

○秋の亥子日の雨は其年霜多し辰日雲あらば其月晴天おほし寅日風あれば其月霧多し己午日はるればその月いなびかり多し未戌の日くもれば其月雨多し申酉の日はるれば其月つねよりもさむし

○十月はトめ甲子に雨降をその冬大に寒する物也

○同十五日天はるれば冬中あたゝのあり

○十月中の日寒からさはば暴死する人多し

○十一月朔日三日九日以上三日はきはめて大風吹日あり

○冬至の日しけくど降出したる雨ははれおそきもの也雲うすくありて少し風吹いたし星ちらくど見ゆるとあらば雨はるゝまゐるしあり

○冬至すぎでの北風はわずかに半日か一日にて吹やむものあり南風も同じ事ながら雨になるとおほし

○十二月三日五日六日八日廿二日晦日はみお風の吹日ありもし風あければ雨降あり寒の中に日和つゞきてよければ來年雨すくかし寒の中に雨まげければ來年雨多し大晦日の夜北東の風吹ば來年五こく豊作あり

○冬は子亥の日の雨は其月寒氣つよし丑辰の日に雲多ければその月曇ると多し寅卯の日に風吹ば其月大風あり己午の日晴れば

其月雨多し未戌の日くもればその月雪多し申酉の日晴れば月霜多し

○冬至に南風あればその翌年早して米高し

同日はれてあたゝかければ來年麥よく登かり冬至に東風吹ば人に災ひあり

○正月元日ふ東風吹ば夏にいたりて米やすく南風吹ば米やすく又旱をつかさどる西風は春夏米高く豆よくみのる北風吹ば水災ありと知べす

○春分の日東風吹ば麥安しその年ゆたかあり南風吹ば五日まへに大水いづるその後旱あり又西風は麥高し

○立春より春分の前後までは東北より風ふげは萬物生長す正西より吹風ば人に害あり

○春の己丑の日の雨は米高し甲寅乙卯の日ふれば夏にありて五

こくたかし又庚寅の日より癸己の日にいたりてあめ降は五こく高し

○立夏の日東風吹て雷東南より鳴ときは年ゆたかあり又西風ははいちむしをつかさどる北風は泉わきいづるあり

○立夏より夏至の前後子辰申の時より降雨は長し又丑己酉の時よりふれば間もかくはるゝ也又寅卯亥午未の時よりふれば或は降或は降ざるあり

○夏庚辰辛己の日に雨ふれば蝗あり又丙寅丁卯日ふれば秋五こく高し

○立秋の日東風吹ば人疫病を受べし南風吹ば秋旱するあり西風は大雨と成北風は冬にゆたかりて雪多し

○秋庚寅辛卯の日に雨降ば其冬にあり五こく高し

○冬壬寅癸卯の日雨ふれば來春にいたり五こく高し

又庚寅癸己の日雨ふれば米たかし
 ○春甲子日雨ふればその年大に旱するあり
 ○夏甲子日雨降ばりの秋洪水あり
 ○秋甲子日雨ふれば米の價たかし
 ○冬の甲子日雨ふればうしひつと多くしす
 ○春夏秋冬とも甲申の日に風雨あれば五こく俄にたかくあるあり
 ○毎月甲の日大風ふけば丙丁の日かあらず雨ふるあり又乙の日
 風吹ば米高し
 ○晴天久しければ戊の日にあふて雨ふる又雨天久しければ庚の
 日にあたりて晴るあり久しく雨降つゝきて晴ざれば丙丁の日か
 あらずはるゝものあり

風雨雜考

○雨ふらんとすればいしづなまづうるほふものあり
 ○雨ふれば氣散トて土地かはくものあり
 ○湖に泡うくこと多きは大風のしるしあり
 ○蚊そらよあつまる時はかあらず雨降あり
 ○飛蟻おゝく出るは風雨のしるしあり
 ○猫の子青草をかめを必ず雨降あり
 ○鳥の水とあびるは雨のふるしるしあり
 ○水鳥樹木にとまれば雨の降きざしあり
 ○犬草をかめば晴にあるしるしあり
 ○犬土をかくは陰雨あるしるしあり
 ○獸の革をたゝきてつねよりよくあるは大雨の印也
 ○鳩あきてかへす聲あるは晴きりかへす聲あきは雨のしるしな
 り